

No 151

攝津名所圖會卷五

長谷川  
合本





二魂坊火  
 野宮  
 郡祠  
 馬塚  
 白井重見  
 宮北塚  
 園見山  
 大門寺  
 御手座家  
 太田神社  
 女九祠  
 東本願寺懸所  
 黒井清水  
 香飼御牧  
 水江  
 宿河原  
 茶臼家  
 牟禮神社  
 佐保山  
 鳥居峠  
 大冢  
 安威川  
 太田古城  
 溝楢神社  
 梅林寺  
 子石松  
 藤杜祠  
 佐和良義神社  
 須久久神社  
 柳木家  
 大冢  
 高山  
 忍頂寺山  
 幣之良神社  
 阿鳥神社  
 雲見阪  
 茨城  
 大石門別神社  
 新屋神社  
 高瀬里  
 井於神社  
 山井清水  
 道祖神  
 海北塚  
 泉原山  
 忍頂寺  
 幣社  
 大織冠荒墳  
 經體天皇陵  
 茨木川  
 茨木祠  
 便水

弁保櫻  
 鳥上郡  
 惣持寺  
 奥院  
 茶師堂  
 政朝卿廟  
 古鐘銘

富田  
 慶瑞寺 碑銘  
 蓮如腰懸石  
 三島江浦  
 鴨祠  
 安園寺塚  
 今珠家  
 安園寺 般若塔  
 芥川  
 廣智寺  
 伊勢寺 伊勢墳  
 三輪祠  
 天神祠  
 三島鴨神社  
 玉江  
 津江薬師  
 帯仕山  
 靈山寺 石標清人書  
 服部古城  
 阿久乃神社  
 上宮天神  
 能因墳 碑銘  
 普門寺  
 清水  
 行葉芦  
 玉川  
 氷室古蹟  
 一本木家  
 神服神社  
 安正寺  
 芥川古城  
 檀神木  
 花之井  
 本照寺 富壽栄松  
 教行寺  
 三島江  
 松永秀故居  
 八十家  
 阿武山  
 名産服部煙艸  
 笠森稲荷祠  
 靈松寺  
 谷山塚松  
 高槻城

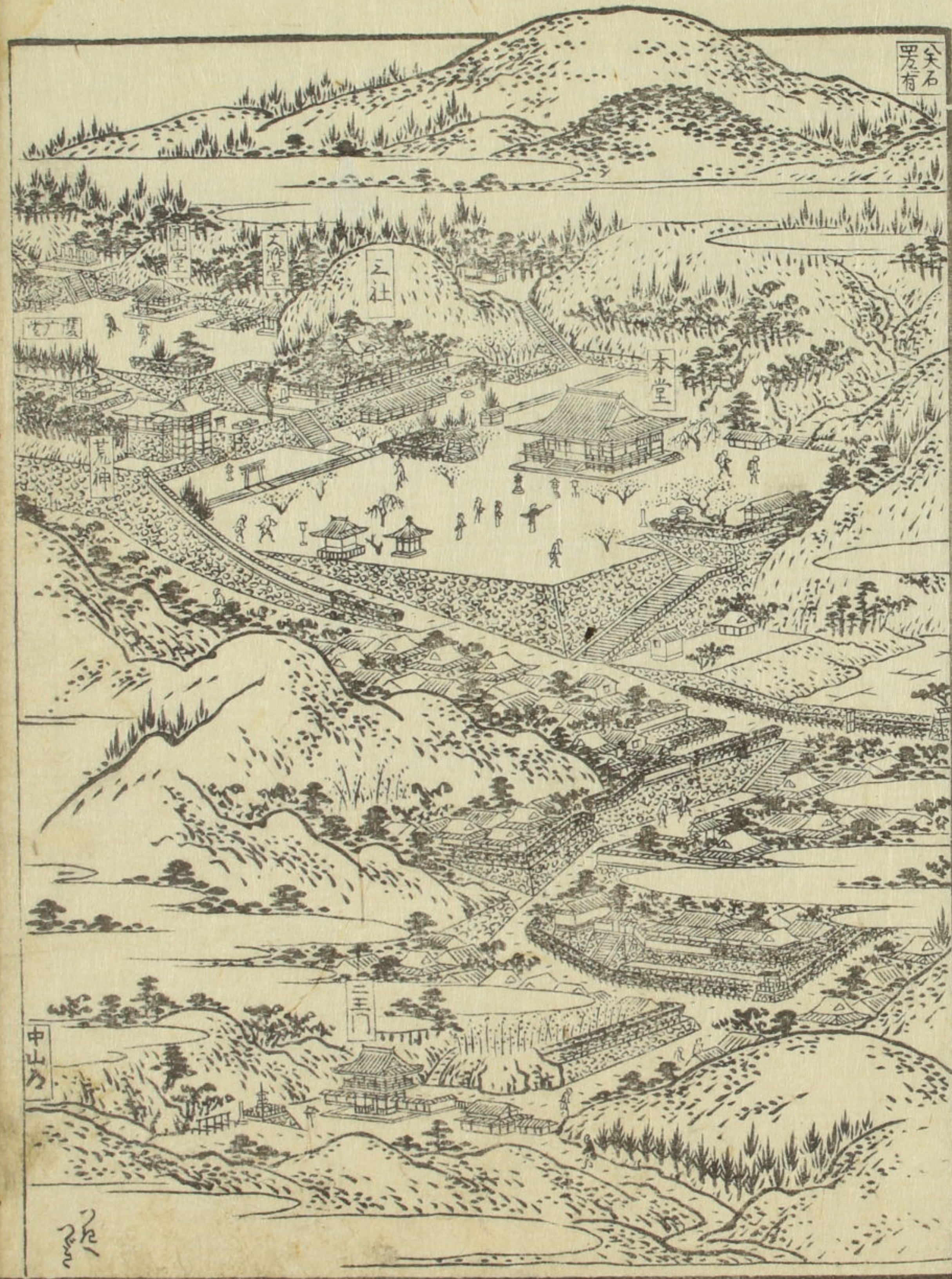
阿彌陀院  
焔魔堂  
城攝園場

廣瀨祠  
岡明神

大山寺  
岡戸院旧蹟

西觀音寺  
山崎驛

野見神社	大塚殿	磯島	冠柳
鴉殿蘆	春日祠	都加母止家	足跡家
上牧祠	上御牧	中御牧	二牧橋
檜尾川	鏡井	妙法家	小井
大澤山	旗立嶺	原山	原池
萩谷祠	本山寺	原石	赤小豆坂
神崎山寺	二王石	明王	安備祠
盤石杜	盤石故宮	盤石里	井口井
金龍寺	六角堂	櫻井里	麻茅原
僧屋敷	神南備杜	櫻井宿	櫻井
侍首小侍從墳	水壺瀨山	水壺瀨瀧	楠正成
阪口八幡	水壺瀨里	水無瀨殿	送所
水壺瀨阪口			後多院御廟



勝尾寺

西園巡礼廿之番札所



鳴下郡

島

東島郡界不至西豊嶋郡界不至北丹羽郡界不至南西成郡界不

和泉式部集

吹風のけき

和泉式部集

二代實録云貞觀四年三月十四日攝津國鳴下郡住吉郡古荒田二十五所

九段奉充中宮職云云

應頂山勝尾寺菩提院

勝尾山高嶺小あり舊名弥勒寺古義直言宗

坊舎廿二坊塔陽群法小豊嶋郡小入一入謬あり

茶の戸小あけられやる白雲の山むらさきの文と云ふ

法然上人

法然上人土佐國より洛の都時をたてて居し

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

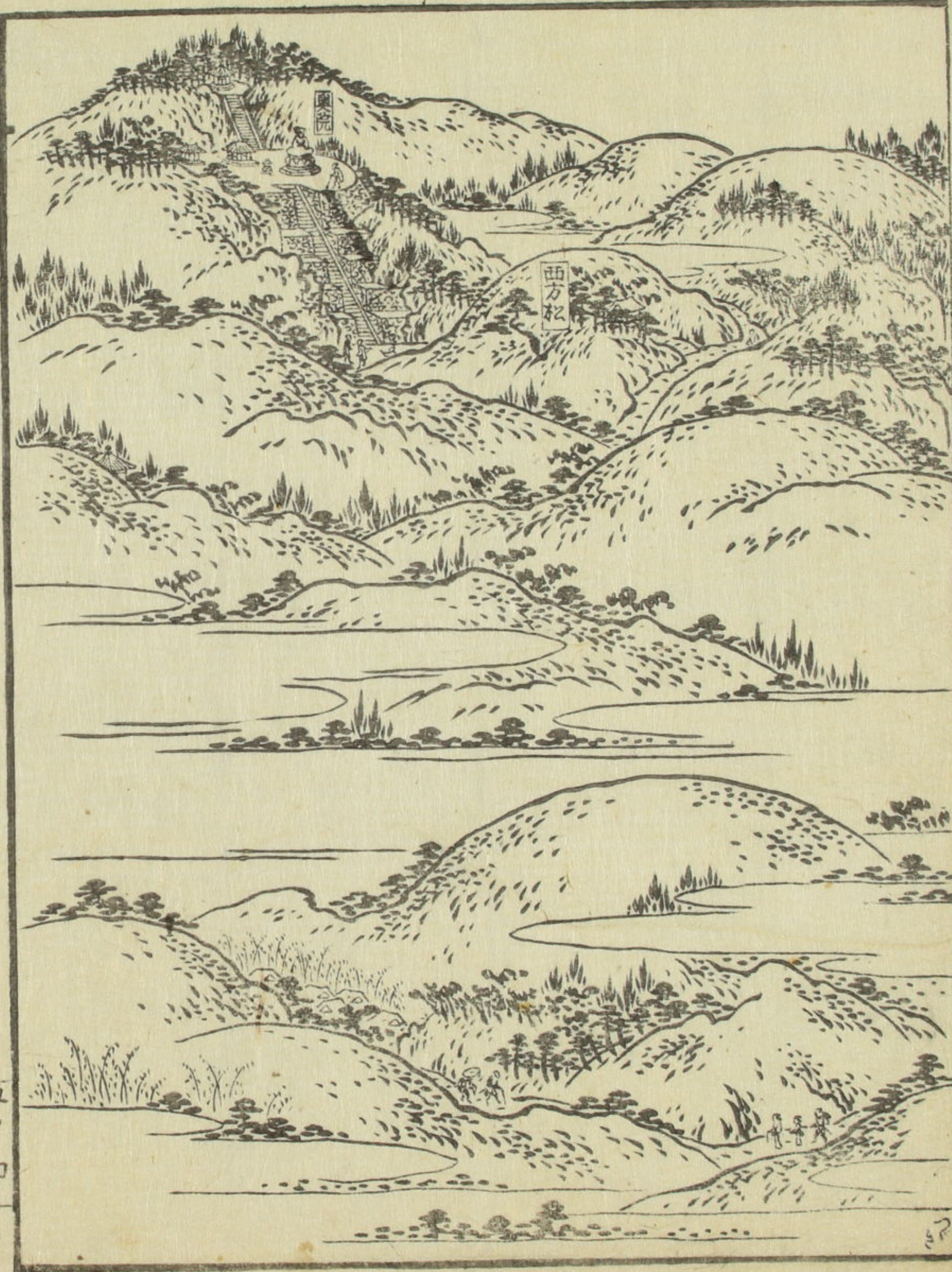
法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画



應頂山勝尾寺菩提院

勝尾山高嶺小あり舊名弥勒寺古義直言宗坊舎廿二坊塔陽群法小豊嶋郡小入一入謬あり

茶の戸小あけられやる白雲の山むらさきの文と云ふ 法然上人

法然上人土佐國より洛の都時をたてて居し

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

法然上人自画

鎮守之所推現 後堂の酒あり 諏訪 恆子祠 荒神の後小

護摩堂 五人尊の安ん 御影堂 弘法大師の像

輪藏 如法堂の東のあり 續日本紀曰景雲の年八幡宮の告ふしりく之長

影向石 本堂のふあり 洞城皇子般着經を書寫しし時八幡宮は石上に

二階堂 當山の上方ふあり 奉尊阿弥陀佛 或は信都乃能あり

授けり人 所を 聖六尊祠 本堂の西ふあり 以空僧正の

坐禪石 坐禪のあり 皇子 岡成皇子石塔婆 坐禪石の

彌勒銅像 兼六尊のあり 上小堂舎あり 希代の人像あり

西方松 奥院のあり 皇子般着經を紀 大黒石 坐禪石の東ふあり

遠林房 日所ふあり 奥州松岩瑞岩寺の坐居禪師の

澄如上人塔 紀の浦ふあり 所を 澄如上人の方漸の浦々和泉

加古教信塔 道公堅固の大徳あり

瀧谷神咒院 以空上人の旧蹟へ 不動石 瀧谷ふあり 高サ三丈許

阿弥陀を痛 日所ふあり 祖節大定石塔 日所ふあり 釋氏祖節大徳

頼朝塔 梶原塔 頼朝の西ふあり 壽永兵の後源頼朝公

今ふあり 泥ふあり 執事さる 其功德と 法善供養塔 日所ふ

熊谷塔 奥院ふあり 阿部丹波守光明塔 愛染堂の

光明院御塔 東谷ふあり 後伏見院の皇子 諱豊仁建武三年

廿四日崩し 遺勅ふあり 當山ふあり 帝王正統録云光明帝康曆

二神六月廿四日 藤尾寺の神所 帝王正統録云光明帝康曆

日來光明院と号し 藤尾寺の神所 帝王正統録云光明帝康曆

八石像 向成皇子の建所 五丈尊 鐘樓 鐘は中善宋園

雨海 國王の后妃と載る 所を 鐘樓 鐘は中善宋園

二尊院 知足院の東ふあり 松林菴と云ふ 奉尊阿弥陀佛ハ惠心傍那

と安阿弥と一軀兩化之世小背鏡の何とと云ふ

被荒神祠 茶坂小 本合庵 二階堂の 愛深本 瓶花本 俱小徑堂の

樓門 二層安 額應頂山 勅額

一衡門 勝尾山より二十六町 藤尾寺 勅額 新家村

それ當山の岡基若仲若等ハ攝別の刺史後原致房の雙兒之

母ハ源氏紀別の刺史懐位の弟ハの女之慶老四年正月十五日の夜爰に

蓮華二莖空より飛来して口小入と見え養育ぬらり妊身小しく終小

和銅元年正月十五日平且小出誕に母病苦なり而室内ノ異香あり

一胞の中小二兒相對に啼哭せしが小笑と舍と孩雅聰慧小生く群

孺小超り九茶小して天王寺の榮湛と師と十七ふして判髪し

菩薩戒を受甫く冠歳小く學内外小通に咸曰夙智の岡發と

と我二人也小頭と並く相語って後と流に人これと側ふ事小し

神龜四年の暮二人潛小入して遙に一家小見紫雲爰隸せり

あふ小あま必盡地さるんく竹唐公結んく安居法修に今乃

勝尾山とあれ徑の地苔蘇小して多獸群とふれ小共に嘆トて曰

願ハ其身と捨れしと必淨利小性ん神護景雲二年二月十五日小仲

竹唐公素して忽に飛去る年六十一爾後等語して禪座を同三年

七月十五日天小冲く西に没に歳仲小準く知卷し

○あふ小岡成皇子といあり 光仁帝の御子 桓武天皇の兄之幼しく

敏頼佛奈志及天平神護元年正月一日潛小宮中と出て勝尾山

小入り石と冬く塔とふし其側小禪宴に二月十五日仲等の二師山

中小徑りて適あま見く向て曰神彩繁靚小して又孔推く何の

た光あに來り皇子素意公告る二師驚て曰己小四旬餘何んか

喰とく中皇子答て二鳥物を銜く石塔の上小墨く我あれと掌内に

甚耳羨るり日々かくの如くをさり雨露小も露む二人共小嘆嗟し

誘門しと庵に帰る日二師に就く判髪受戒を其時奉有の

五智公證し法雷の五趣公卷くの二句公授く菴公讓て化たり



初ノ二師願を發して大般若經を書寫し啓白の日黒雲俄不起く  
雷地小落あまの靈所より般若を置んと觀ゆ今乃寂勝峰  
あまのそれより陶成皇子當山の貫首より又般若を寫さん  
とく津金水に祈は七日満ざる夜爰小容儀端嚴なり  
衣冠の人より青綿の苞に持て石上小たれ我は金と心く  
師と共に泥墨とふん皇子これと受て誰人あるやと問へ彼人  
偈を吟み答て曰得道以來不動性自八正道垂推跡能得解脫  
苦衆生故彌八幡大菩薩爰覺て几上より小金錠あり徑  
三寸長七寸皇子感喜して其所小立る石今あなあり水に祈ふ事  
一日夜爰見るを人北方より飛來る形表又の如く八幡宮我は天竺  
白鷺池の水と取く師の經滴小充をいと命に吊信州諏訪乃  
南宮の神に寤く見る清水阿伽器小盈まば皇子これに  
大般若經を模寫し寶龜二年二月の爰小八面八臂の鬼を尺

丈餘百千の眷属を乗る各經帛をたつて山谷に散ると爰覺く  
魔障くと和まども慰供の軌則を志し忽ち飛來つて糸文乃  
儀軌を落し皇子これに供を以て所謂荒神供に般若の  
功畢つて雷墮の地小道場を建て經を安に遠く龍養の會に期に  
故小弥勒寺と號し寶龜の如く光仁帝金水の事は聞く  
官租を捨し如法堂を造は桂窟の居を移し弥勒寺成就小  
遠んを田數百畝を授けて寺を以て天應元年十月四日香燈を  
ふふより西に向ひ低頭して入寂し奉五十八時小自茶師の像を  
刻り奉奉に遷化の時に像涙滴して花座に至は今あな痕  
初濕の如く云傳聞講堂已不成つといはる本尊ありは皇子  
八尺の白檀木と得ゆいあまの像材とふんとあひくも  
良工の如く寶龜十一年七月五日沙門妙觀より小茶の口を結刻  
すんより十八人の僧侶を伴ひ遠小千臂千目莊嚴端嚴の像成又

下  
とれ  
月  
退  
風  
虫



吹田  
液口



四天王の像を加へて五尊にす日小く成純に八月十八日妙觀合掌

して化に從ふ所の十八人久々に觀自在の如く十八日

○百海國の后妃愛を國王愛を小壯齡に邁行ふを愛を

向の后はわが慈く慈を服法驗を求とくも切ま一夕后

の愛に日本勝尾寺千多人悲盡感さるひゆられ祈まを后た

返んく日本に祈願に怒發神碧ふて拾たさるは是より

二人の宮使朱朝一厨伽羅金鼓金持等の寶物と持あり

○證如上人は勝尾山に住居し中姓の時氏當國豊後郡の吏佐通

子あり弥勒寺の證道に隨ひ顯密の二教を學び修練ふ人なり凡

住山より年五十年の時別小草席をむむびく言語を絶し

当練仍をくば一夕天樂室を知られを怪んくこれを聞忽ふ人

有く戸を叩く證如を言わばは磬をありて答へ戶外の人曰我

是播州賀古郡の驛民沙汰教信之令極樂に性生に明年今日

上人も亦我れくあふ一聖衆と共ふありゆ人と語り已く去

微光廬にややくせり聚洛を巡り佛を讚説し念佛を

勸誘に貞觀八年八月十五日室を出て沐浴し門弟子小告く曰

去年教信が云来る日不相違より各小暇を以て室に入つて戸を

中金光耀煜し香氣著く薫に天曉く門子戸をひくく

○當山六世行巡の智竹兼依の名僧也 清和帝御の時勅使二

すもありしうも久しく當山の雲外くいす聚洛の塵に交るに

容易出山をゆるすと申され勅使藤原依道著大率去の濱王臣小

あづばといふ来る一争勅命小肖くやとのまのり順松枝に茶座

を居に佐道をして枝の下土小洗く小瓶を其時行巡一丈許

空に昇りぬ佐道驚くけ中奏に 帝敎聞しゆひよく渴仰し

帝を勅して曰宮中へ入るもとくも願ひ覆護と密より巡尋

法衣一領念珠一理と献じられと 帝の枕上に墨ぬ人を清惱迷に

平念しゆん敎感の餘り阿闍梨小補らと二々の庄園と寄附しゆ

帝の命ふりて詔命蒙りて應せし天子不勝之びて弥勒寺と改免  
勅して勝尾寺と號し尾山の麓に在り。上件五師の傳記に元亨釋書及  
本條記に摘ぐるに記す  
其より諸堂巍々として元慶年中帝仍舊し中興之代實録小  
及より物換り星うりて嘉永のに梶原宗時一の谷へ發向の時堂舎  
と云火に其後頼朝公將軍とありゆふ時資財を寄附し尚と再營し  
ゆふ奉りし然谷梶原と聞ゆ二階堂の承元年中黒谷の法然上人  
土州より歸洛の時若導大師兼中告て曰津土の布薩戒を授ん  
揚州勝尾寺小會をて一同年正月十一日衣若導大師兼現しと  
布薩の真戒を授く今生時の教跡を壁板小遺に二階堂を考の左右  
小あり建曆元年七月十五日法然上人自畫の船形の室燄乃光中子  
泥金を以て阿弥陀佛十聖の名號を書しゆ今も存せり  
其次のり建曆二年法然上人黒谷小於て入寂しと傳ふ塔を  
當山二階堂の良の隅に建る其外寶器靈品多し

知足院勝尾寺の山の中ありむろ多田彌佛公の別居所也  
子小幸丸とありは院小初學に一朝故有る父乃  
樹令を受主君英大丸に代り命を預りし一樓の櫓に  
樹を以て敬奉す樹とあり又一盤陀石あり是は幸丸石  
居正の猶小遇りて今亡世に傳ふ幸丸の文殊の化身と  
居和尚の像を画く瀨一と曰  
義堅石容潔如珠代主君命現菩薩軀舊房  
今有感新畫以為圖文殊即幸壽幸壽即文殊

外院帝釋寺

栗生外院村小あり寶生山と號し

本尊帝釋天王

聖徳太子師也脇士亦賦之昆沙門天

帝釋降臨松

堂あり明神水

佐井寺

古義真言宗

本尊十一面觀世音

僧正の基感得  
赤梅極長二尺七寸

五裏殿塔

當山あり之を石塔安あり  
神護持供養の塔とて不詳

當寺の聖徳太子の州建之其後弘法大師も之に入山しゆ  
年中小清和天皇御遷居寺に幸しゆ初ては入らせり  
山上傍尾さか都率の内院小表に當山外院と稱しゆ今地名と  
あり年毎七月十六日よみ日詣とて遠近より來觀して群とせり

地藏堂 日所ふありむりは地ふ光明赫然たりこれに穿ちたるふ地蔵菩薩の  
佐井清水 尚ふ水乏し今小圃出に眼疾を罹へて愈まざる人々を癒す水溜り  
行基山 當寺の西ふあり今愛宕と改稱す其山に古刹あり出雲の靈地と  
一本松 遠く山ふあり又り基松ともいふ古松あり此溪の大樹と  
鎮守 八幡宮春日明神外願天皇と系は尚村の生土神と

天保七年二月十六日僧正行基ありに至りては瑞光あり昂  
其地を掘りり人を梅檀香木の大悲の尊像を感得たり是古は年々  
述ふは公奏園一を詔で得て伽藍を築創し坊舎十餘院の梵刹  
也成 禁裏淨續經を執りし寺の具一と  
天正の老公小羅子堂塔坊舎一時に焦土となりぬ正保四年寺藏の傍樂順  
再興の志願空しり領主板倉周防候持鐘公寄附し銘を  
系師東寺長者亮春と云ふ書に 禁裏淨續經の式に代實撰に  
公事根源云

天保七年二月八月大般若經百敷して儀せり四ヶ日の事  
少くは二の日みり茶とて僧小茶と稱す未あり天保元年四月八日に  
て下すは貞觀の法ほひの毒季ふりわれりとも  
伊射奈岐神社二座 一座は山田庄小川村ふあり今五社明神と稱し山田五ヶ村の  
延喜式神名帳に出又云代實撰曰  
貞觀元年正月從五位公授く  
蓮向比 山田上村ふあり 横比 山田下村ふあり 綱引塚 山田村ふあり  
山田庄の田圃の中にあり由縁不詳  
十餘畝  
山田庄の田圃の中にあり由縁不詳  
十餘畝  
山田庄の田圃の中にあり由縁不詳  
十餘畝

斤山帝釋寺 斤山村ふあり 本尊阿彌陀佛 兼心傍郊の住持長武尺又寸  
慶長年中の 帝釋堂 境内ふあり聖徳太子の所化立像に尺又寸  
再建あり  
圓塚 斤山村の田圃の中にあり由縁不詳  
虎宮火 別荘村田圃の中虎の宮とて神祠の古跡ありは森より雨夜に  
遇ふ人火を飛出たり又土人曰火龍と足るは龍陽村の自然と地中より  
火を震雨の後濕地ふ暑熱龍と云ふは龍陽村の自然と地中より  
飛り出たりは火の發するは龍陽村の自然と地中より  
化入りては龍陽村の自然と地中より

吉志都神祠 系師村ふあり七社の神とては村の生土神あり每茶  
正月十日日附と撰りこれと系師村と稱すと云ふ



第拾  
原  
娘  
控  
の  
尻

湖  
夕

名次神祠 峯部村小あり 大池 峯部村小あり

之所神祠 二宅の東藏願村小あり 二宅の莊 五ヶ村の生土神と云

靈勝山降前寺 味舌上邑小あり 金剛院と云

本尊藥師如來 の基の化座像長四尺六寸 脇士日光月光十二神將

不動尊 弘法大師の化長八尺 本堂の良小 西門跡 あり

大平猪宝年中僧正仍基難波律遊歴の時北方は茶葉の場あり

和信正法に至内所に老翁に遇ふは地は人慈有縁の靈場と云

移舎公創と云くは後々の影公興へる小飛んて光山味舌寺と

の基自り大慈の像影公興へる小飛んて光山味舌寺と

号は郷中も此寺の領地の時あれ味舌と号に一年賊を懸ひ其内

村民あるは防と云くは御ふし時に大慈の殿内より教千の降前寺と

出く賊徒を退退けて安堵ありしむと云くは改て靈勝山降前寺と

号せり万治年中宿阿園架再興して中祖と云

味舌神祠 一庭は味舌上村小あり 系神牛頭天王一庭は味舌下村小あり

○味純宮持律志小日別有味舌一社のあり其古蹟と云日本紀

孝徳紀と引書し又延喜式味舌宮持律志小日別有味舌一社のあり其古蹟と云日本紀

東小橋の旧名と云味純宮も其迎く按る小味舌の文まに月く云に

吹田液口 淀川の支流神崎川吹田村より

吹田神祠 吹田村小二庭あり 牛頭天王皇祖明神と云は所生土神と云

高濱 吹田の濱と云く又濱上郡小同名あり 夫本集持律園

高濱 又越後國小も同名あり

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

来て見まふ世もるぬ下高濱の松小むむる鶴のけさゆも

鳥飼とりかひ  
藤原社ふじのらのやしろ

大和歌載

浅みどり  
くひあつまふ  
わひゆれ  
辰あつと  
まのゆり  
くま  
大江玉鬘女



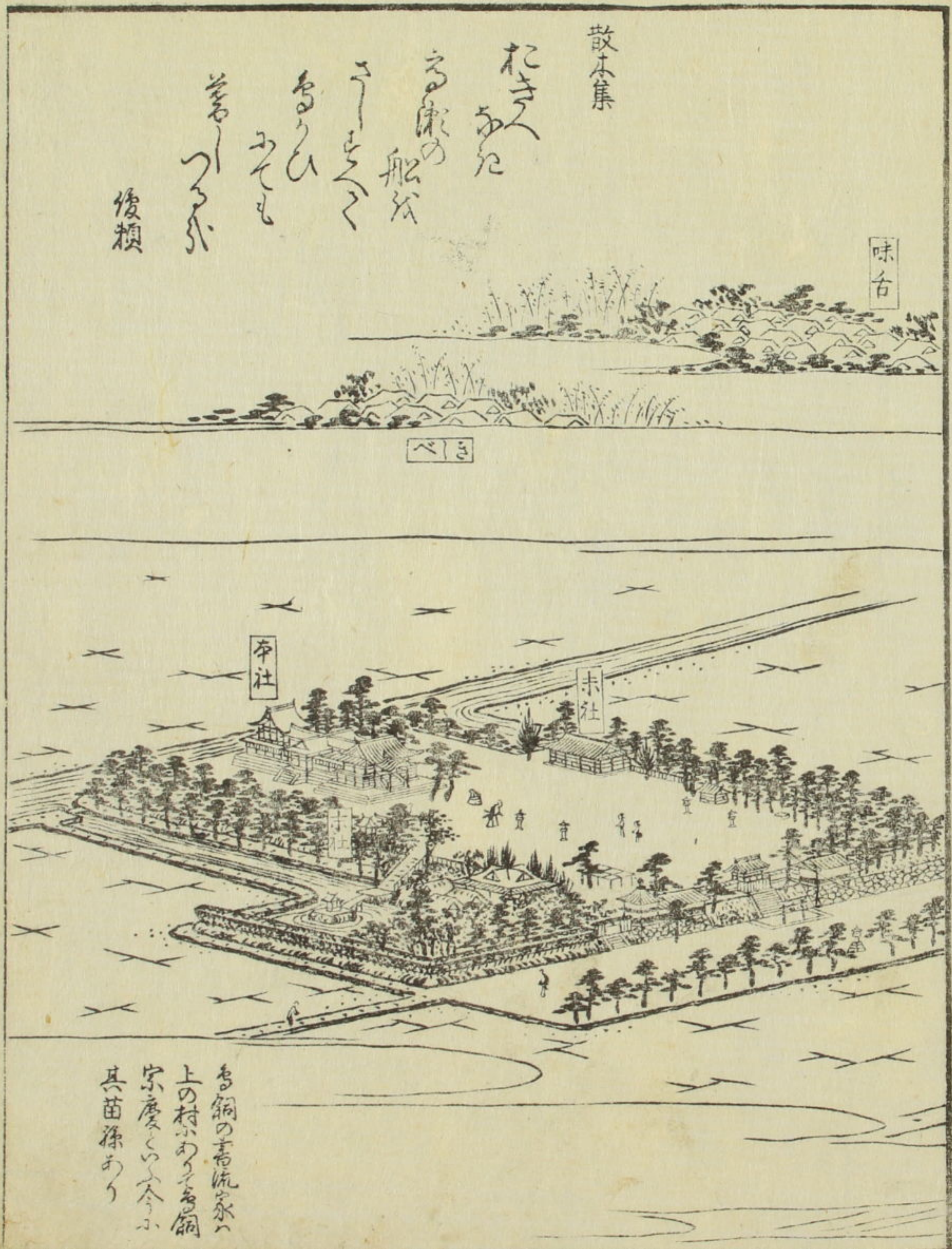
川川 上上

散木集

ねき  
あは  
ふの  
船  
うし  
あひ  
あそ  
あつ

後撰

味古



鳥飼の書流家へ  
上の村ありて鳥飼  
宗慶といふ今も  
其苗孫あり







放逸盡懸けの極あはとも死とらうくし七少もるがまらうくのいふた

うたはく人のうらりしきふらうを侍らぬ 云 村方の林の中より

須久神社二座 歟 韋の延喜式出 山并清水 宿久莊 清水村あり

馬家 郡山村東二所あり 正統元年將軍義昭公山城真山城に據

茶臼家 郡山村の東あり 村本家 日所あり 訥傳不詳

道祖神祠 系神猿田考余

白井螢見 郡村向形の初夏の末より螢多し土人云天正年中

螢の源二位頼政の亡魂とて一旗死の鬼火とてり又山川字法の

化して螢とあり又格物論曰螢はちと腐葉及び燐竹の根に化す

新入の北ふ生れ 大暑の初日あり 螢の初日あり 螢の初日あり

依保山 泉原村の上方あり 山腰に泉あり 故小名とて

泉原山 山腰に泉あり 故小名とて

鳥居峠 山神の多井あり 丹波五折村へ出ゆ

忍頂寺 忍頂山の麓あり 寺令院と号し真言宗

本尊正觀者 南基御成皇子三代實録曰貞觀二年九月廿日卯

寺庫小織田候細川藤恭中澤飯尾

右馬允等の施入文に載む

大門寺 題詠集在題詩集等あり

本尊如意輪觀者 南基御成皇子の化

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許

長き尺許



當寺小於文祿四年七月三日本村常陸公  
自殺後石碑今在在  
幣之良神社 耳原村あり 鍛鞞延喜式出生土神と云

幣社 社類の神藤原  
月衣ももろく此社もろくはちろくあふ漢いあん 漢人志ん

阿爲神社 鍛鞞延喜式出 安威村あり  
大織冠鎌足公荒墳 安威村の西あり方二町許一堆の丘ありと云安威山

安威川 丹波丹州桑田郡能世岳より 少く布部法成若羽鉄原より  
川より一別府に至る

藤原内大臣兼 日本世紀口内大臣春秋五十而薨云云  
元慶元年十二月十三日己卯勅定毎年獻荷前幣於五墓

贈大政大臣藤原氏墓 下畧  
御食子大連子大織冠鎌足 天智天皇時改中臣賜藤原

内大臣正二位藤原鎌足子不比等右大臣從二位贈大政大臣  
藤原淡海公也 云云

釋定憲大織冠の長子之初 孝德帝の妃あり妊身より六月  
大織冠寵遇厚と云ふに之妃を賜て主人より約して曰産後

所の兒男男子ありを臣が子と女子ありを朕の子とせん既より  
男子と産後故小鎌足の子と云ふ沙門慧隱に授て出家させ名を

定憲と號し白雉四年遣唐使小隨の海を涉り初唐の代長安城に  
到り高宗の永徽四年慧日寺の神泰法師より習學する事數

十年調露元年 唐の代の百濟の使小伴白鳳七年秋九月小伴朝に定憲

藤原内大臣兼 日本世紀口内大臣春秋五十而薨云云  
元慶元年十二月十三日己卯勅定毎年獻荷前幣於五墓

贈大政大臣藤原氏墓 下畧  
御食子大連子大織冠鎌足 天智天皇時改中臣賜藤原

内大臣正二位藤原鎌足子不比等右大臣從二位贈大政大臣  
藤原淡海公也 云云

釋定憲大織冠の長子之初 孝德帝の妃あり妊身より六月  
大織冠寵遇厚と云ふに之妃を賜て主人より約して曰産後

所の兒男男子ありを臣が子と女子ありを朕の子とせん既より  
男子と産後故小鎌足の子と云ふ沙門慧隱に授て出家させ名を

定憲と號し白雉四年遣唐使小隨の海を涉り初唐の代長安城に  
到り高宗の永徽四年慧日寺の神泰法師より習學する事數  
十年調露元年 唐の代の百濟の使小伴白鳳七年秋九月小伴朝に定憲

唐小左に時大織冠をて小薨に定惠身（靈）の丞相不比等（比）向て曰先墳を  
 何處の所を對て曰揚州阿威士之定惠身也（靈）先公むり（靈）潛に  
 口を不語り申す和州誌云多武家（靈）靈勝の名區大唐の五基山（靈）牙  
 比我あふ墓とせば子孫益昌んと宣入我身五基山小左に時  
 爰に先公先公告く宣入吾を小左に生は汝法家小寺塔（靈）管と  
 佛奈瓜修せよ口にも亦く小左に後昆公擁護せん時に已巳の歲  
 十月十六日の夜二更あり丞相聞已く後夜して曰先君の薨る期  
 其年其月日あり師の爰使あり官人と從て阿威士よ先公  
 遺骸を携て談山に改り葬る（靈）ひつろと我（靈）已上元亨釋書  
 委大和名所圖會に出ス  
**太田神社** 太田村小あり延喜式出俗傳云相殿二座内宮外宮天王（靈）系係  
**太田古城** 太田村小あり上古石風呂在とて東鑑曰鎌倉隨兵太田太田  
 賴基あり宅地（靈）ありとて  
**雲見坂** 太田村小あり太田賴基ありとて天文と見く（靈）考一軍乃

**繼體天皇陵** 太田村小あり二傳藍野陵と辨に二傳は上古の莊号あり藍野  
 小左に延喜式あり洛上郡とあり今洛下郡小屬に陵の封境方  
 六十間許廣小坂あり陵上小石棺の發る形（靈）石四ツあり形も大サ  
 五尺許之祿年中公命小左に洛改の第は石農家に散在せし（靈）  
 亂入の御制礼あり土人池上陵とて又小坂五ツ傍小あり又小祠  
 あり年額天王八幡宮（靈）あり  
**男大迹天皇** 繼體天皇更名 譽田天皇五世孫彦主人王子也母曰  
 振媛振媛活目天皇七世孫也 同帝五年冬十月遷都山背  
 箇城 同帝十二年春二月丙辰朔甲子遷第國（靈）山背 同帝二十年  
 秋九月丁酉朔己酉遷都磐余王（靈）和 同帝二十五年春二月  
 天皇病甚丁未 天皇崩于磐余王（靈）時年八十二冬十二月  
 丙申朔庚子葬于藍野陵  
 帝子傳曰  
 ○應神天皇集總皇一々迹王一私斐王一彦主人王  
 ○繼體天皇 人皇廿七代  
 延喜式曰 在位二十五年  
 二嶋藍野陵磐余王穗宮御宇 繼體天皇在攝津國葛上郡北城

東西之町南北之町守戸五烟九毎年十二月奉幣諸陵及墓云

凡諸陵墓者每年十二月十日差遣官人巡檢仍當月朔日録名申省

其兆域垣瀆着有損壞者令守戸修理專當官人巡加檢校云

女九神祠 上野村小あり系神を伴は西の生土神とて例祭十月十一日土人曰

其證云伴 陵の傍小葬りまふふあくとを

溝檝神社 儀杖莊馬場村小あり延喜式出目垣村十一村二階堂村等三村の

事代主神之孫瀧檝耳神之女王櫛媛所生兒号踏鞞五十鈴媛

令是國色之秀者 神武天皇悅之九月壬午朔己巳納踏鞞

五十鈴媛命以為正妃

茨木 又茨城と書け町名北四條下郡都會の地と交易の商人多し茨木城ハ福富

茨城川 一名佐保川源二流一ハ佐保山より流る一ハ橋尾山より流る二水中川系小會て

東本願寺御坊 茨木小あり教如上人開基城州伏見江州大津當寺等ハ

梅林寺 茨木にあり津土宗中川瀬云清尉清秀の菩提所云

茨石門別神社 茨木小あり延喜式出目垣村の地主神とて

茨木神祠 日所小あり系神中央素盞鳴左妻日明神右八幡宮茨木

○同云云凡く村里の生土神延喜式の神名を喪ひあつてを益し一多

稲卷天皇と稱し神代の天神と云ふ神とて山城大和にも祖人より土人

生土神とて世に上みふは義とて一は神名を喪ひあつてを益し一多

天正の年織田信長公四海掌握の計策小より南蠻國より邪宗門

とて一由一具より諸社諸山と滅亡とて一初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

は宗徒公に至りて元の地一は信長公に討たれり初ハ日蓮宗公信一

黒井清水 茨木の社の後小あり名水ありて暑暑増減あり

千石松 茨木社多井の傍松小ありむりは松公石の末儀ハ



古廟冠織  
ふしやうのこやう



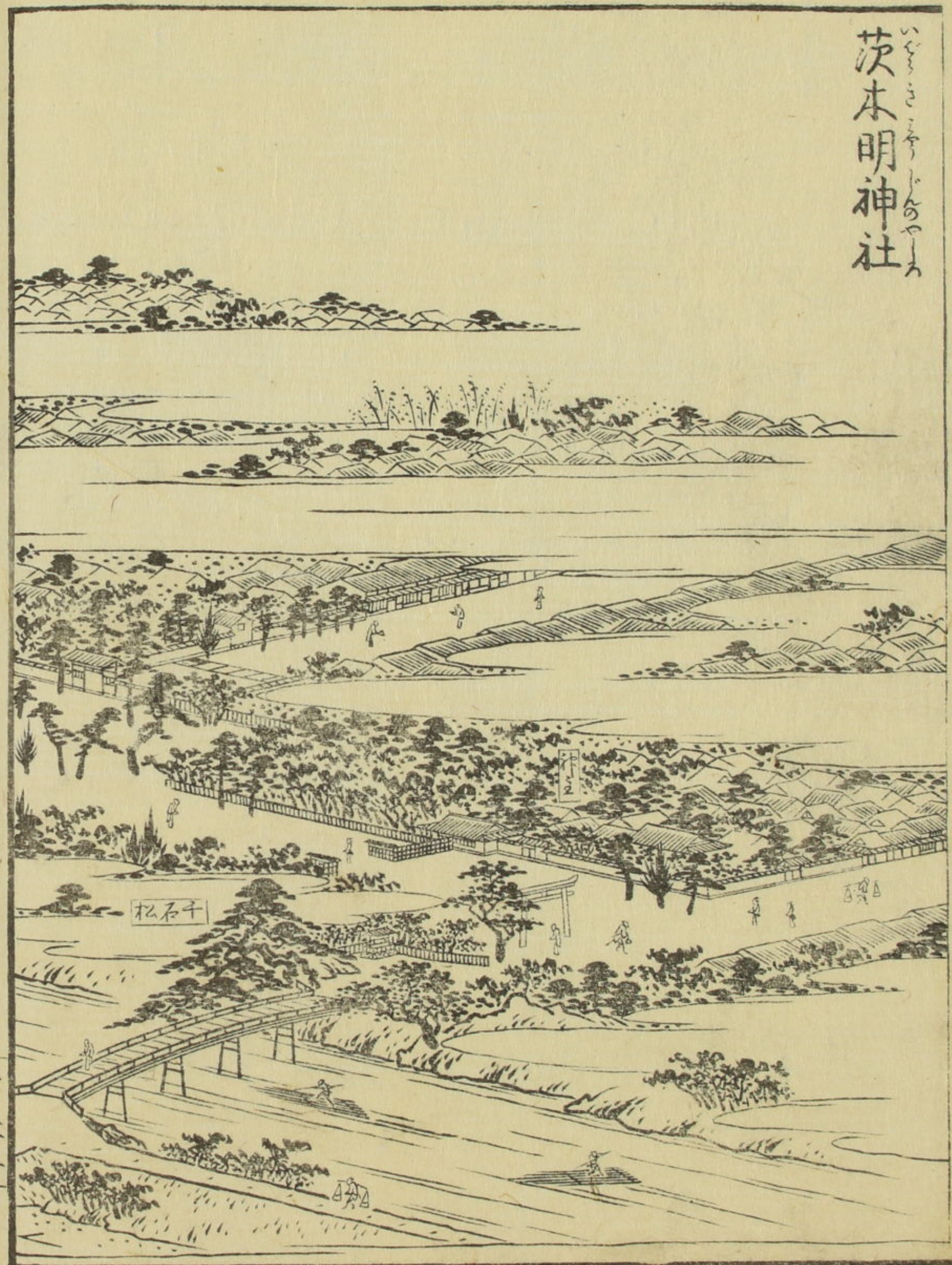




故郷なるの盛に  
極て瘴水の側と  
あつて瘴病と  
治さる半の心  
とらふ心は  
山のたけの  
藤のま珠に似  
とれとてあつ  
つて半と



茨木明神社  
いづみあけみのかみ



補陀洛山惣持寺

寺領惣持村小のり真言宗古義

本尊十一面千手觀世音

西國巡禮所 兼觀音化現寺子也

脇士 左春日明神 右天照大神

詠觀音 長六寸 方丈小安並に本尊と同也

奥院 本尊阿彌陀佛

山蔭政朝卿廟 奥院を御座小あり 奥院の室息女等の像

藥師堂

同村の中ふあり 深王寺と号す

古鐘銘 朝野群載不出より其鏡をひく今新鏡あり古銘曰

奥祖父越前守藤原朝臣歸心於普門妙智傾首於無礙大悲而墜露溘然閃電條爾納言尊考於先業之不遂歎善因之未成多以黃金附入唐使大賀御井買得白檀香木造千手觀音菩薩一曰惣持寺於是第二男備前權介公利鑄豐鐘一曰干時延喜十二年夏四月八日

惣持寺ハ 宇多帝寛平二年敕命大守藤原高房卿の奉創

一條院 後一條院 白河院 鳥羽院の四帝の御所也

勅額所と成庄園公賜入厥后 後小松院宮儀の寺記に賜入今

も存せり元龜年中高山右邊が火不諸堂とくく灰燼とる也

其時尊像火中に在り焚ゆ奉ふ一慶長八年六月豊臣秀頼公

諸堂再興あるを仍り行桐東市正と修闢一

揚州下郡小名刹あり園西二十三所觀音の靈場と初越前大守

藤原高房卿志性清慎みく為小觀自在不啼一兼和十筑紫

太宰府に遷る嘗て舟と淀川に乘りて穂積橋に至る時小漢人

龜は多く携へり高房とね公悉く贖く川氷に放り怖然として曰

今日乃大士の誕辰と具とた一ツの大龜首を奉り高房を顧去る是育

二月十九日の衣東の山嶺小玉危嶽昇り乳姫小公子を抱く悞る中

墮くたれむる房愕然として觀音念に忽一龜の兒を負く水面

小浮を微笑する公見る房大に喜びて曰信に大慈の神力少や

昨日龜を放つ今日子公救ふ何ぞ感應の速あるや遂に太宰府に倒

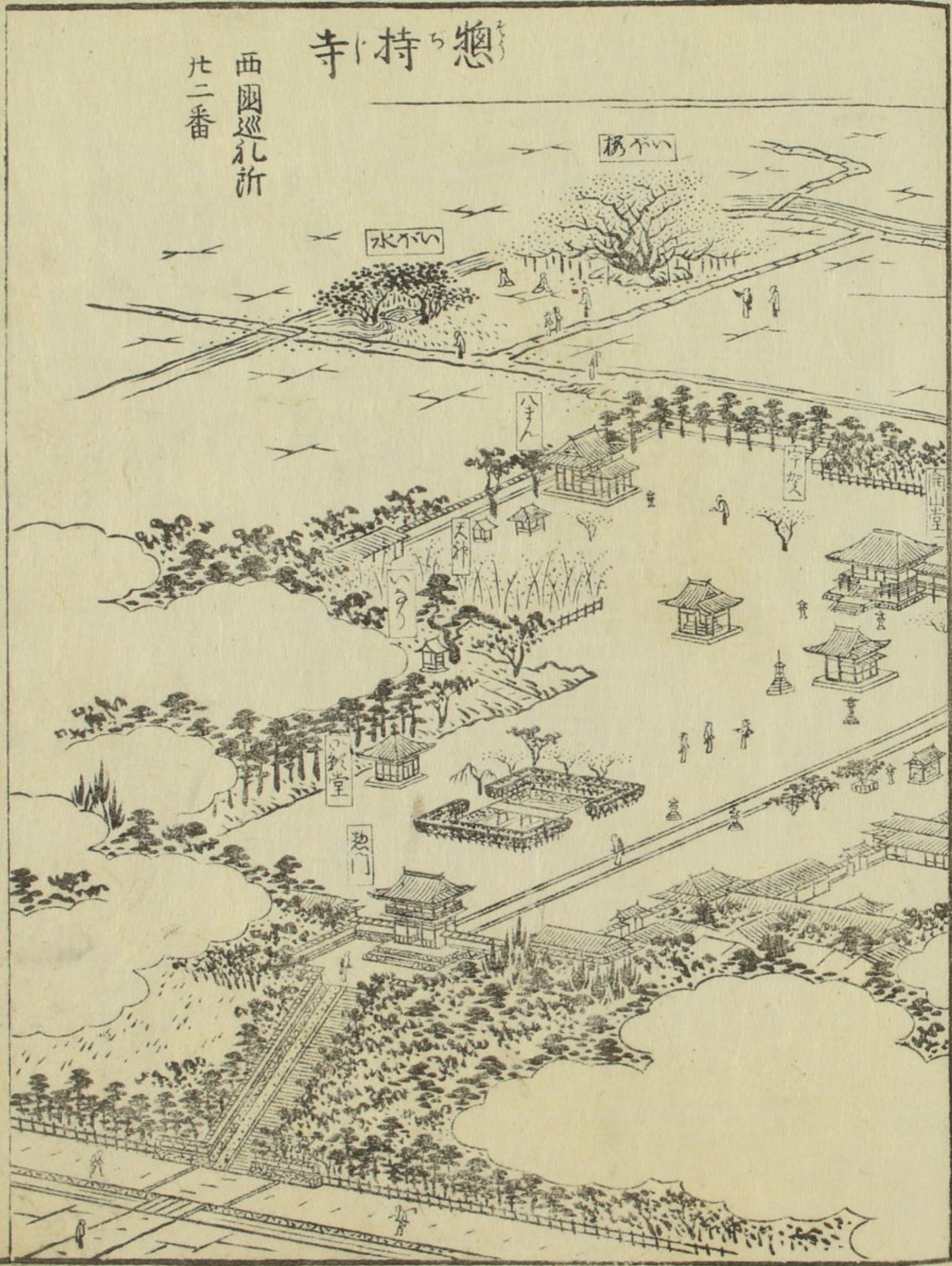
時小唐國の人僑といふもの有る房は是を詰りて曰我大慈の像

造んと欲す是をいす良材と得る人僑白吾本國信濃山の林藤乃

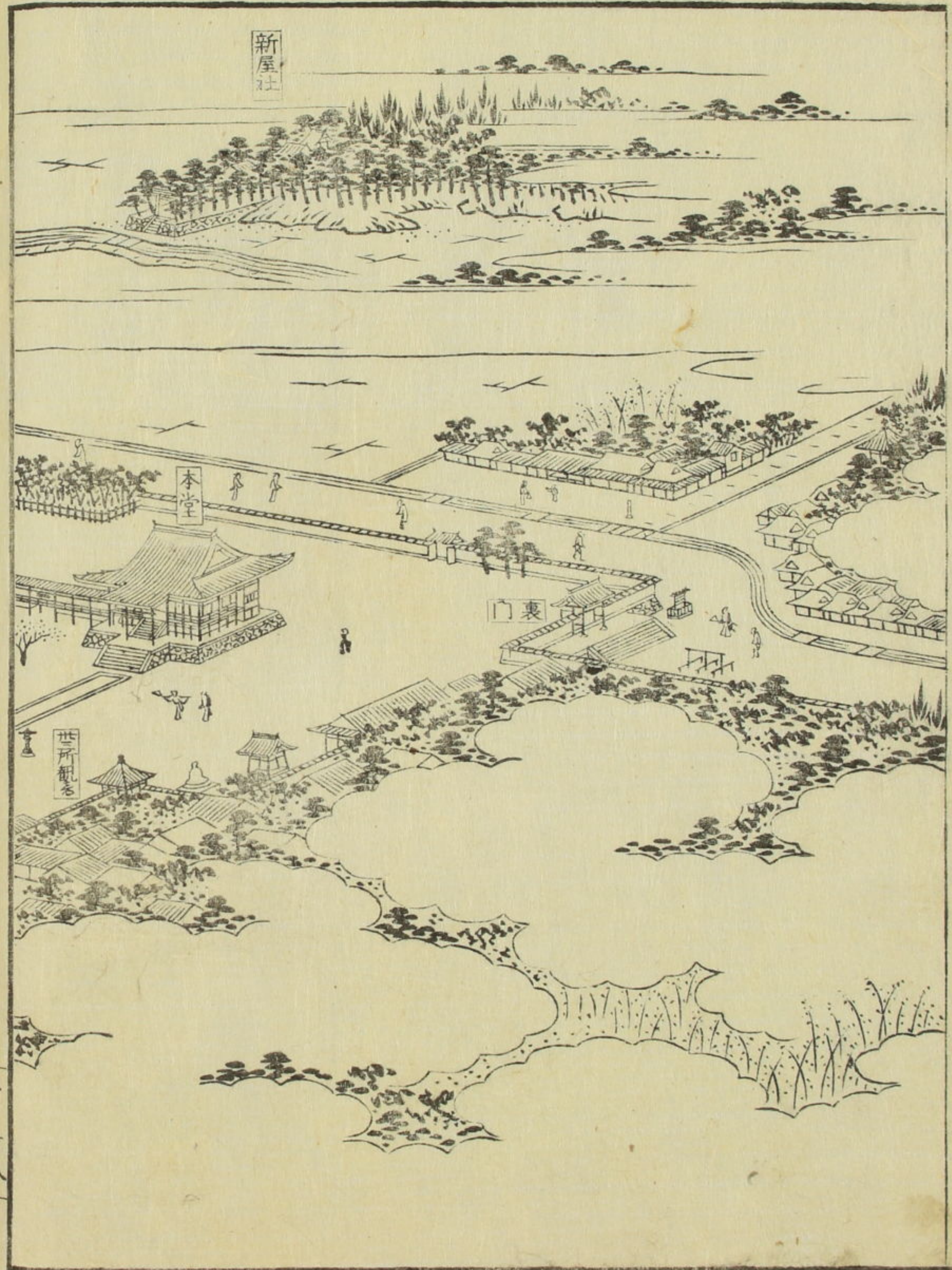
湖中小白楯本のあり時々光放つ高房楯の黄金人僑のあり  
園小瑞々しくむ人僑就ふ像材と傳く昂日本へ渡さんと官府に奏に  
御是ともあれと許さるれども人僑其本に文字彫る曰旃檀  
香本 張之六六す 日本高房小房はわくのゆく一と東海小房高房  
薨して後英門希政朝又鎮西小遷り園中を巡りて亦に村民  
告く曰は海辺杖毎小光あり英門其所至とあるなる小清涼  
の香本之感激特小甚しく當ふと親自在の應驗之早く大慈の  
像を造つ君父の遺意小報とて一と香本を携へて京師小引く  
揚州下郡は地不至と増く惣所に像材をた束磐石のぬ  
英門驚て密小初咒して曰あるに縁のむ尊像成就の後は  
地不安にべしとたに於て移た束故のぬ一良工を擇に粧と  
和州長谷寺小詣りあるに禱る七日ありと大士告く曰明晨  
その人に遇べし翌日果して一人の童子鐏刀を持して来ふ其形

甚醜 英門問て曰汝よく吾を小大慈の像に刻まんか童子  
答く我拙いあれども君と許しぬ彫刻しん英門大喜び伴て  
京師小詣る家人童子を視て議して曰は良材再び得難し先此本を  
かく試めんとし昂小像を作しむる其貌絶妙之故小一室を構へて  
奉ふを延くあるに造つむ童子曰は戸を閉く予日予臂を刻まん  
英門もは祈して齋戒精進する半三載期小臨ん戸を閉たれは  
視る小童子の所在をたれはして大慈の像儼然として莊嚴具足の  
尊容を因茲當小知る童子昂長谷親者の應化之る像の靈驗  
ありある未幾あるに英門没去に時小仁和四年二月に日息小  
七男七女あり寛永二年先父の大祥忌に値く遺誓あり今この地小寶殿  
と創して是像を安置して彌陀洛山惣持寺として冥福を薦む是  
より靈應益新之厥后 後小松希寺記の宸翰を賜ふあるに於て愈  
光耀をばし四衆をれ小調るる来あるの敷小對くがぬ

惣持寺  
西園巡礼所  
廿二番



新屋社



嶋上郡 東有河津川と西有下郡界を限り北は山州乙訓郡及び丹州

富田 河名北四真峯上郡の都會の地なり

二輪神祠 富田郷の生土神之例祭九月六日祭神大和國之諸山の勸濟人

春日祠 二輪社の

慈雲山普門禪寺 日郷三輪社小隣に禪宗原録倉建長寺の末寺之今

佛殿釋迦佛 檀の額 神機 對 鑿 隱 元 等

後水尾帝神牌 正親者像 共小方丈に安ん建具の繪直の山水繪也安信等

岡基説嚴和尚 本願細川右京太史時元

昆沙門天像 合堂小安弘法大師の他天正年中高山石辺高國

殿走より幸 龍の子に教を授けし故ふ富寺を急那の禪を免は

富山養善院本照寺 富田小あり 淨土真宗

本尊阿弥陀佛 安阿弥の他 長尺八寸

宗祖親鸞聖人 七為傍本山茶屋上人の教右脇櫃に安ん

富壽榮松 堂前小あり 龍盤のめぐり蓋覆せり

むす鶴の姿 養善の松系枝なくをくをたれる 養善の法 冷泉村郷

それ富寺の岡基に本願寺存如上人の者随武部郷正信房之母近州

親者古城主佐々木兼禎の息右衛門督義彌入道玄幽の女之某創の時

存如上人より光照寺の辨を賜ふ殿后蓮如上人経圓の時あく止宿

のりそ化益の消息 養善 蓋 養感得のあを遺しゆふ本教古十二代良如

上人の蓮枝 養善院良教あり寺藏しゆふ本山浄坊高樾浄堂附與

せられ光照寺改く本願寺の一字を改むしゆふ本照寺と辨を遺し

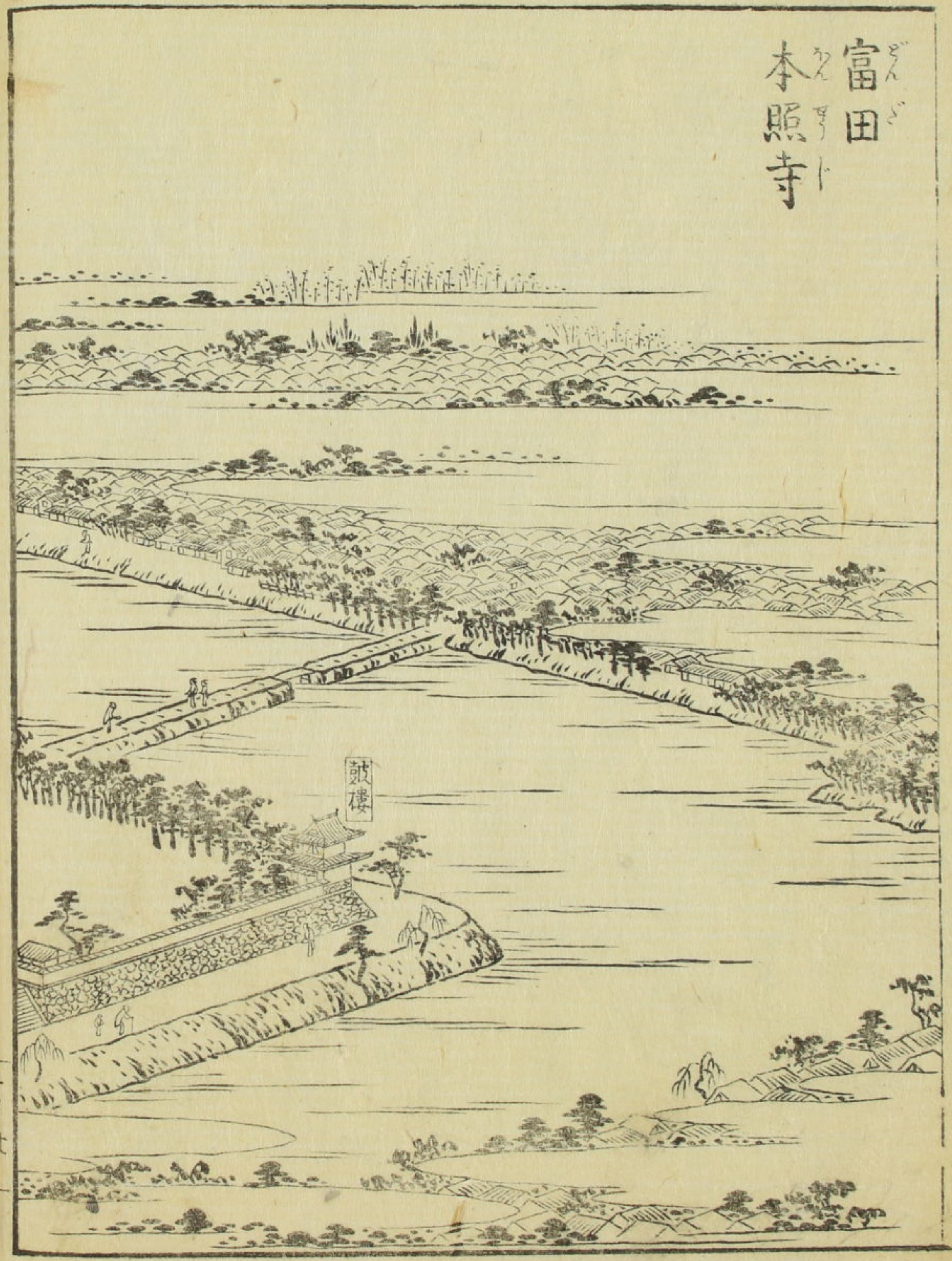
年冷泉村郷富山寺傍に熱縁あり未駕しゆふ従来持る浄陀

の像を納り二部経を書寫しゆふ表書あり詠歌を悉記しゆくあり富

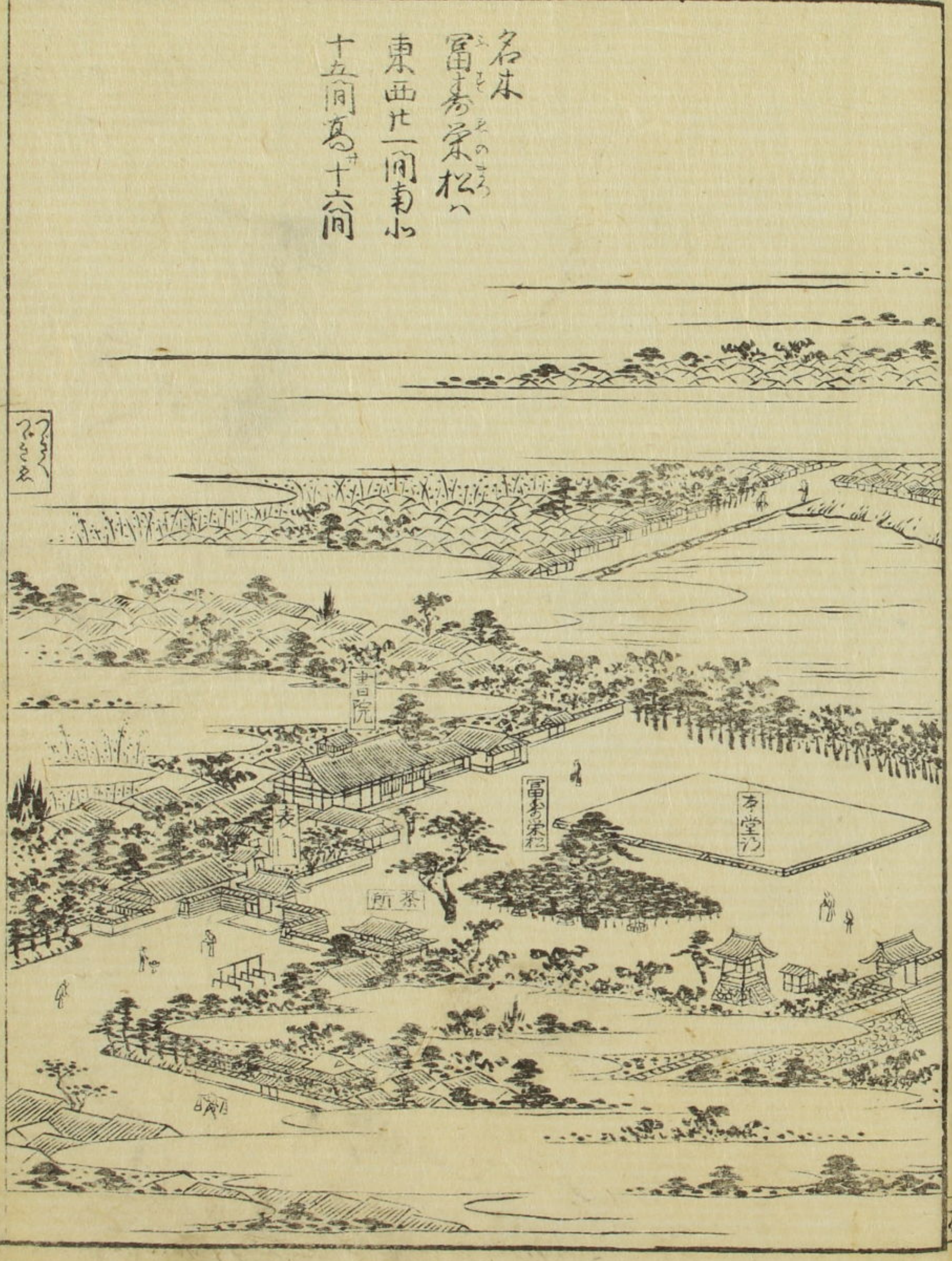
寄附し其法慈をゆふた事しゆふ堂前の古松千尺を凌て蒼々

たる瓜んぬ富壽榮松と初て林し柳有瓜賜ふ

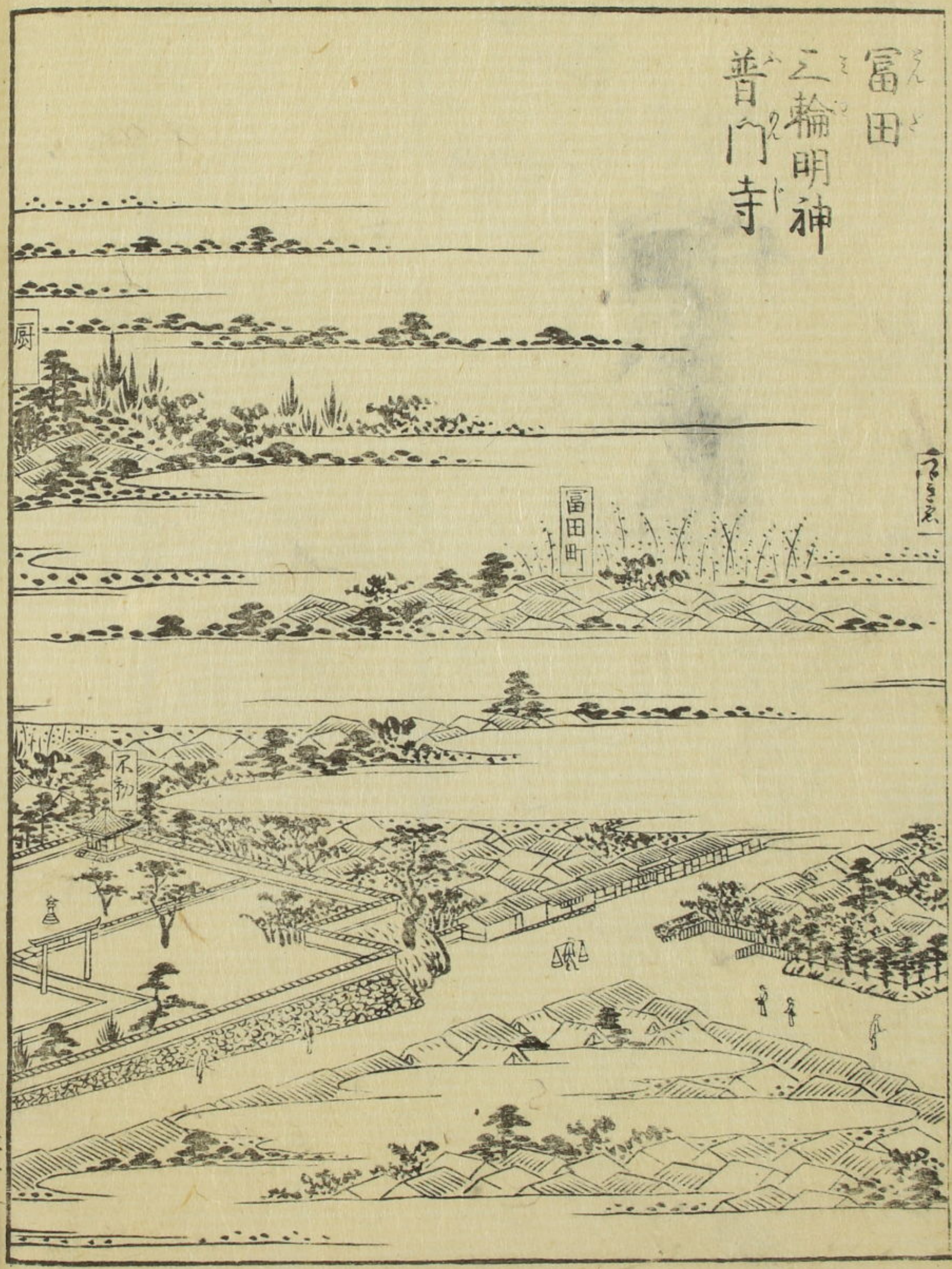
富田  
本照寺



名本  
富考榮松  
東西廿一間南北  
十五間為十六間







祥雲山慶瑞禪寺

富田の莊小あり

禪堂本尊觀音

赤梅檀香木大竺昆首竭摩之の化舊の禪堂の聯

觀自在

本尊頂の額あり

觀自在

禪堂の聯

普應

二重の檐の額

通

下の檐の額

檀幢主人翁喚醒眼睛明日月

露柱の聯

殿

若壁隠元

通

若壁非

混淪皮袋子折翻鼻孔風雷

費隱

開山正統禪師塔

後水尾院御建立

天光塔

靈元院法皇

後水尾院

禪師の宸翰

杖桑第一枝

禪師の塔

常僧宗(風)

角山の聯

此外禪師塔の木牌あり

山光法眼明

木庵

文ハ為泉の茶あり

祥雲山

惣門の額

方丈

後水尾院御建立

為如

書院の額

濟道與時全身擔荷

惣門の聯

祥雲現世通界輝耀

為泉

寺説日 當寺いみ(景瑞寺)書

持統天皇紀八年道照法師の開基

法相宗

道照法師の菴司田部氏門あり住居一寺領農家の長

其後授向氏と改め菴主今其古

中諸堂を火小罹く唯一堆乃

松林の存をせざる小應永年中松岩禪師中興一寺

東福寺の月泉和尚

の疏若小時の人景瑞菴と

實正二年松岩禪師入寂の後文祿二年

法也彈正少輔長矩檢地の村古蹟

除地小定ら其より兼應の

以ひひ終の菴菴公むとひ

禪室と相續一明曆九年諸檀信の招

小夜一普門寺の龍溪和尚中興

一文字慶瑞寺と改免延宝二年

初々慶瑞山萬福寺の末院と成龍溪和尚

詔七本宗正統禪師の孫

賜ひ尚山中祖と称し拈龍溪和尚

慶安四年妙心寺小勅信あり又

兼應二年普門寺小再住は是年隠元和尚明

の乱を避く日本(後)崎陽

小止宿龍溪和尚い

一首の詩を熱吟く隠元の

德澤と暮ひ朝小奏一明曆元年隠元

と普門寺小信して真禪の額力益

盛之始ふる曆元年 後水尾上皇時

兩所召し禪法師聽受らせら

則徳山入門の神制家の加号を賜ふ寛文二年 台命を蒙りて山別大和田莊小  
美壁山寺公創建一同年十月隠元和尚進山あり是より美壁派日本に  
興隆に 持別ふたつとも四十餘ヶ寺あり悉記をる事 寛文四年少邊列日也  
正明寺小龍溪和尚進山一 太上皇の勅額を賜ふ同五年林丘寺宮  
光子内親王所受戒あり其時當寺方丈所建宮ありて所建紫雲寺後希  
徳代紫雲寺所附あり同七年也 法皇所開悟ありて龍溪和尚公  
師といふいし神傳法あり其時佛牙舍利所香等教ふ公賜ふ同八年  
太上法皇宮中少く所受戒ありて 美壁一宗の源流とて之を  
代々後水尾法皇の 後同日本美壁宗派與禪初發の地之嘗て隠元禪師  
は地小六年止宿し少く美壁進山の後二世本庵和尚小令せし是當寺  
尊者の勅言一壯あり其文小曰山小崇あり水小源ありの向あり故予  
當山と美壁一宗の崇源といふんとぞ

捕津州島上郡富田莊祥雲山慶瑞禪寺開山  
特賜太宗正統禪師龍谿大和尚御葬塔銘

其略云師姓奧村氏京兆人而多病父其家  
禱佛始五歲忽病疽父痛哭適有僧至其家  
詢其所以乃腰下灼灸少而愈父喜問其  
名字任止僧不吝去自是益信三寶母喜入  
東寺習密教師之叔父見師氣宇超邁謂之  
子乃宗門人胡滯乎此師即入攝州之普門  
寺時年十六剃度納戒雷意禪學越二年遊  
食風臥雪凡六旬五年速讀雪竇語錄極力參  
者又在六年乃得慶快因謂衆曰我來曾知  
不在文字上今日始知亦不離文字慶安四年  
老金剛賜紫住持妙心寺承應三年再住常  
尋師印可須評虛堂語錄事義師恒欲入唐  
尚應化得州適有僧至問和尙有言何句僧  
答近有得云得法然與衆入會議請普門一  
去來有師聞得法然與衆入會議請普門一  
夙契丁酉夏得法然與衆入會議請普門一  
旨月龍顏大悅賜法皇召入殿問法對稱  
九月黃龍大將軍捨德勝地給僧糧師歌對  
新皇召甲辰正月賜梅檀香十斤明金綃等  
法皇額師說法已十餘月藤大妃請師座說  
勅賜寺額二旛枝十御園禪師為禪師座說  
月資福寺賜二旛枝十御園禪師為禪師座說  
山資福寺賜二旛枝十御園禪師為禪師座說  
王宣戒法賜佛舍利塔梅檀觀音像初祖像御

牙御杖等明年三月師進天  
平公賜御香白絹畫屏等  
幣卷一皇咨詢四月法皇問  
一法皇咨詢四月法皇問  
著請益錄為宗統以錄大正  
翰其略云為宗統以錄大正  
其以機奪得鉗以毒攻毒何  
紫茸現成須彌古高洋海不  
大通徹大也始知彌古高洋  
月師領也又賜古法宗大  
旋省黃衆就正明謝乳之  
坂諸擅護請寓弟宿而九島  
曰六根涉境那言滅心不隨  
廿踏二日應有司齊是夜合  
要師高聲至揚聲聽次早  
忽暴雨驟至山海震動旋  
從者促師逃避師曰死勢  
端心正念可也弟等見險  
是責之三乃索筆書偈曰  
持正念胡顛倒乃爾如

三十年前恨未消幾一回受屈爛藤條  
今晨怒氣向人嘆喝卻倒香江

書已秘諸箇中浪屋裂一時湮沒師獨  
坐水中夷然不動頂坐疑其無恙即而視之  
白張惶竟至見羅拜聲大如維于特賜山  
蛻矣乃當空也即日迎歸閣維于特賜山  
八月廿三日也即日迎歸閣維于特賜山  
殿嘗出內府金為惜減御膳者數日城州  
州正明揮日必就正瑞覆以堂宇示尊嚴也  
每歲諱日必就正瑞覆以堂宇示尊嚴也  
供養然後始奉于塔上又賜經藏以鎮之  
示寂の地ハ板橋壞嶺九崎院の下にあり  
天神祠 慶徳寺の隣にありハ慶徳寺の下馬堂とあり  
延宝の再興ありハ慶徳寺の下馬堂とあり  
清水 本邸の隣に清水氏の家あり清水氏の  
江府 本邸の隣に清水氏の家あり清水氏の  
世に 寄田酒と名を承る

それ塚足遠とふ一川の那  
小川もあつて流は清き水  
かりと半あつて通ふ志み川か  
尚白



富田とみだ  
慶瑞寺けいずいじ



五ノ北立

教行寺

富田小あり 東平頼方に属す 和州著老教り 兼常所へ

本尊阿弥陀佛

聖徳太子七高僧本山 本位上人の教と安ん

傳云文明年中蓮如上人は寺小をうつり宗祖親雪聖人著しり 教行 信證と書寫しり 富田東口永照寺の

蓮如上人獲魚石

富田東口永照寺の 境内小あり

三峯鴨神社

三峯江村小あり 延喜式出度 西面柱本等 生土神あり 系神事代主命 尚社伊藤三島伊豆三峯 ありて成二個の

三峯とりし 凡土記云 神徳神社ハ大山積命ノ孫 彼高津宮所宇ハ神 百海國より渡來し 多し 伊の國所傳に坐位と云 尚社ハ一ハ堤の 上小あり 具所の標石今に社前小あり 庁葉芦 尚社の神籬ハ多し 文字摩滅し 分不明あり 按 糸川辺の芦ハ 後れた 多し 自然と庁葉とあり 又其性瓜受之 芽立より 庁葉と生じり 多し け地もむく 川原あり 性瓜傳へ 今に庁葉に生じり 凡土の奇く

三傳若宮祠

唐崎村小あり 系神八岐基日

三傳江

五位莊の内 古末和赤の名所ト云 代々の勅撰に多し

拾遺

みいぬ江の入江はまもぬなり 小をけり 是かを君ハ ちひさく たり

後人志

新吉

三傳江の玉江は 薦成志り 一より あり 中を ちひさく たり

柿人丸

新吉

三傳江の入江は まもぬれ といふ 志原に 川人もま

又相言

新初

後古

後後撰

後後拾

新拾

新後拾

後拾

詞系

夫本

夫本

三峯江浦

三峯江とりの 夫本集 撈津園 又三傳浦と許ハ 伊藤肥後の 園小あり

日

風吹は花咲く といふ 一に 櫻貝 ちひさく 三傳江の浦 小あり

五江

三傳江の 一々々 又東生郡 小橋村 小玉江の 旧跡あり 仁徳帝の 所宇 葛蒲とま ちひさく 今田畠と 和赤と ちひさく ちひさく

後人志

柿人丸

又相言

後人志

柿人丸

又相言

後人志

柿人丸

又相言

後人志

柿人丸

又相言

後人志





東山  
 圃更  
 小水  
 乃  
 月  
 や

川王

お屋

入心

川王



本  
 橋  
 小  
 陳  
 味  
 君  
 御  
 ま  
 乃  
 乃  
 乃

三  
 鳥  
 鴨  
 神  
 社

定川

五ノ世八

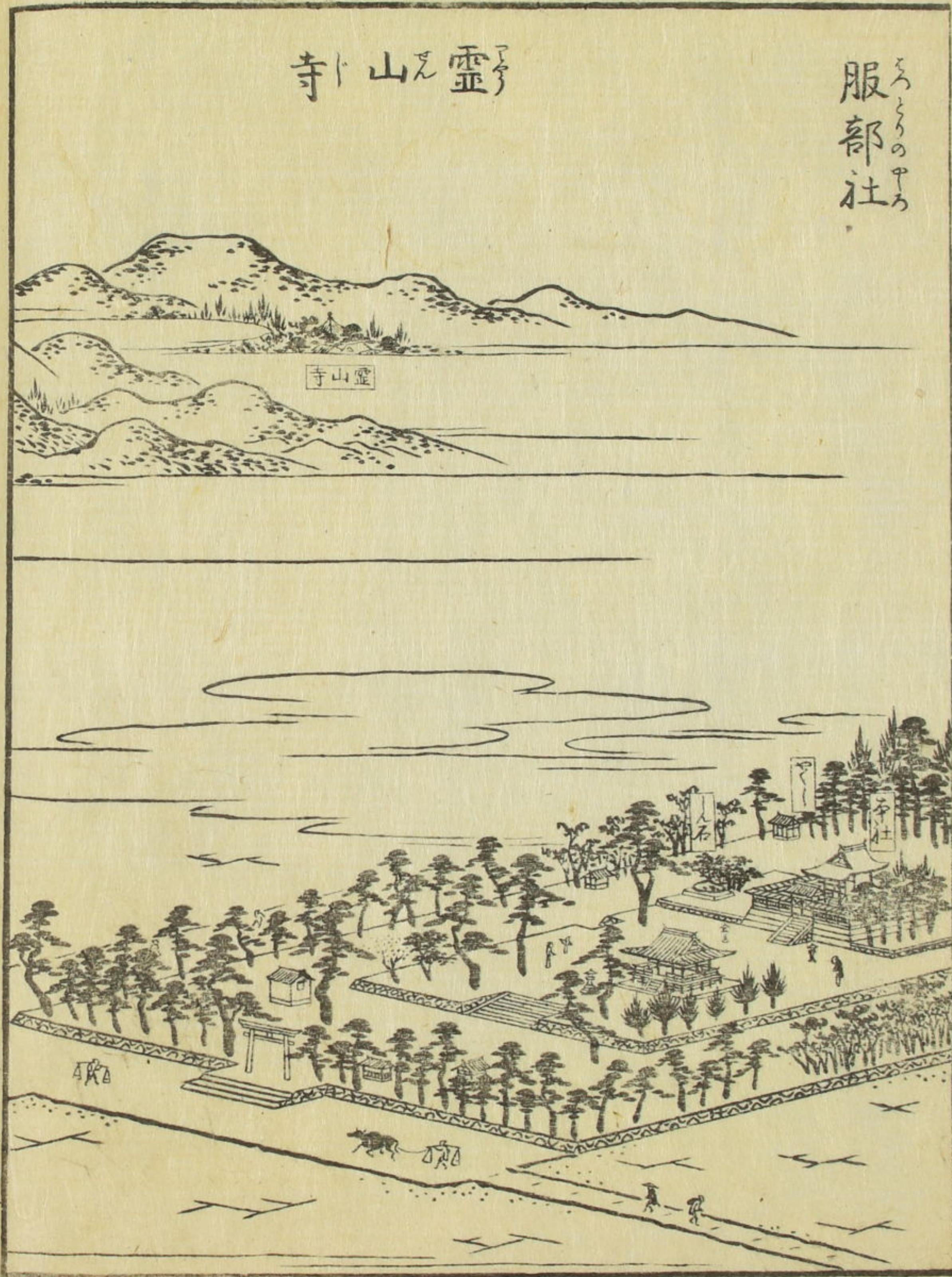


寺門大



寺山靈

服部社





有石塔一僧指之曰是皇太子藏石經般若之  
處其經每石一  
字曰天童子聚  
許迴皇使新書  
余可乎僧曰然  
山能知者亦能  
知垣善不人敢  
上徑踐望捕外  
客未入如畫坊  
無十一六亭樹  
人可遊俱新耳  
問延而僧曰荒  
令畫而掛燈十  
六羅樹而漢畫  
一之燈俱新耳  
問延而僧曰荒  
令畫而掛燈十  
六羅樹而漢畫  
堂一之燈俱新  
耳問延而僧曰  
荒令畫而掛燈  
十六羅樹而漢  
畫

### 服部古城

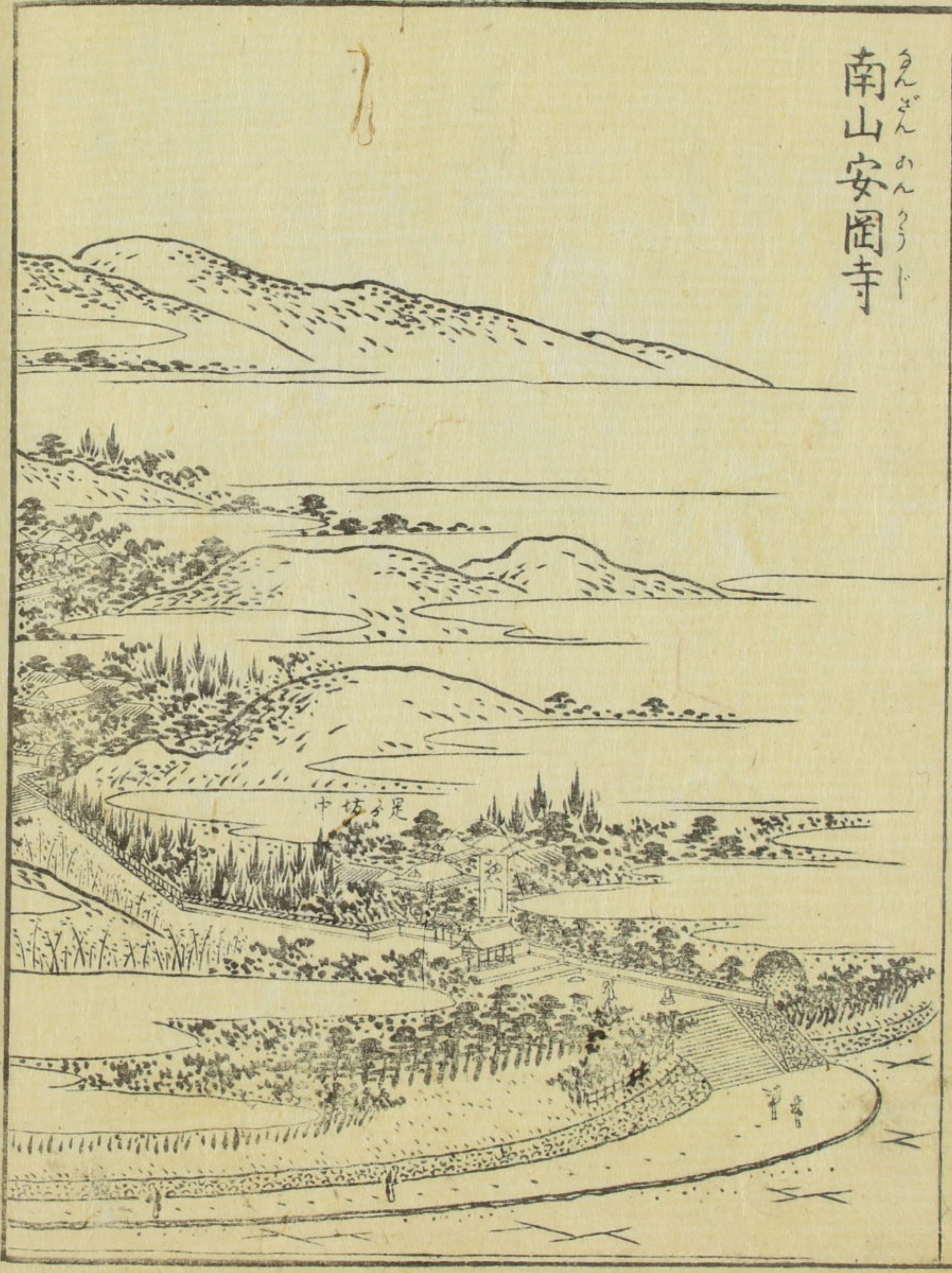
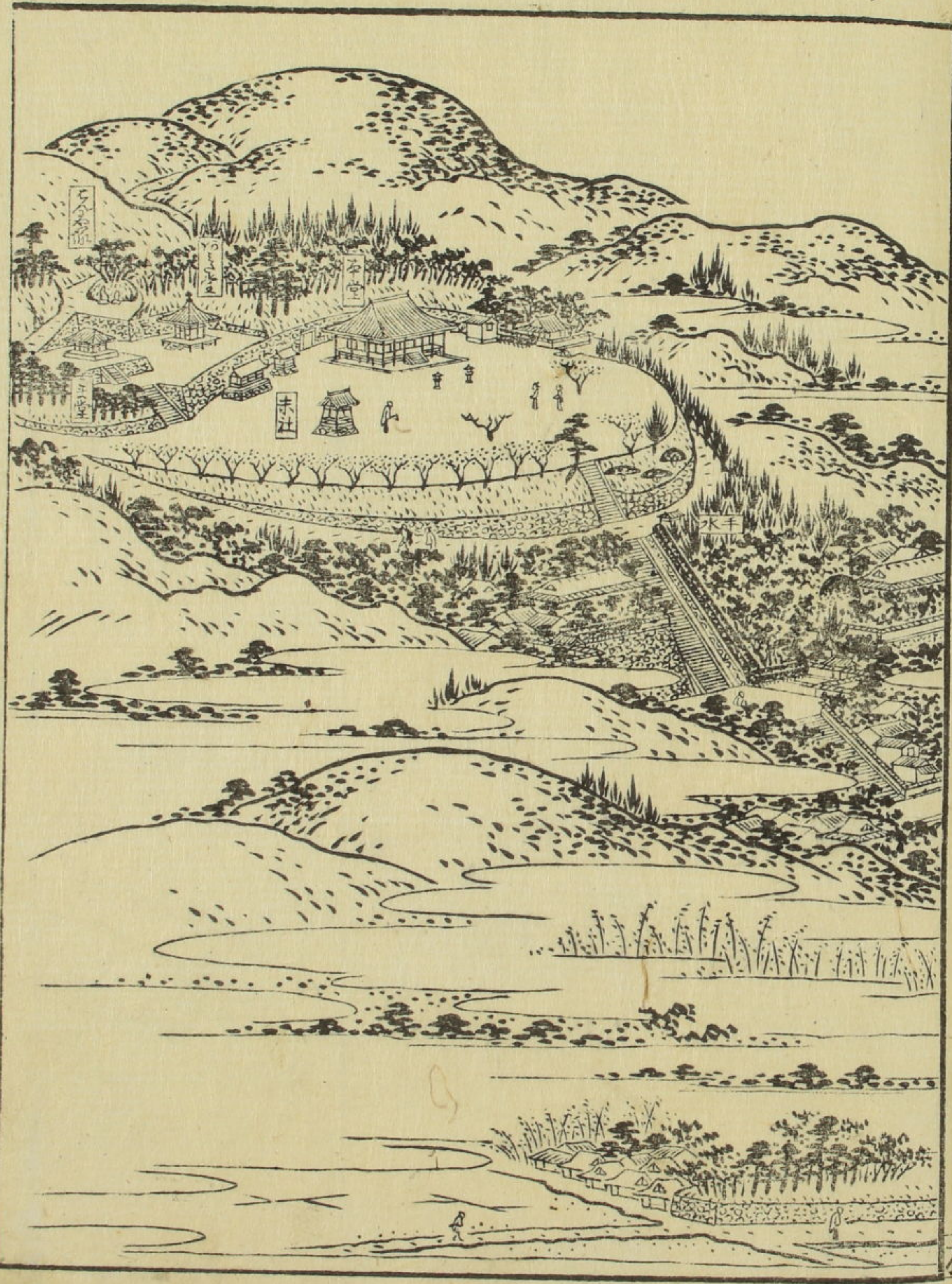
#### 安正寺

真上村あり  
本尊千手観音  
傍心竹基の化  
唐像丈六  
梅の観音と林に  
堂あり梅の古木あり梅の四時青くあり梅の故小世に梅の観音と林に  
古木の枯る其實は植接して後堂あり  
堂あり梅の古木あり梅の四時青くあり梅の故小世に梅の観音と林に  
古木の枯る其實は植接して後堂あり  
堂あり梅の古木あり梅の四時青くあり梅の故小世に梅の観音と林に  
古木の枯る其實は植接して後堂あり

### 蘇川

蘇川あり山州乙訓郡外細の山中より出本郡原村に至る木山溪と合  
報蘇川と稱すを崎に至る蘇川に蘇川村驛跡あり  
蘇川あり山州乙訓郡外細の山中より出本郡原村に至る木山溪と合  
報蘇川と稱すを崎に至る蘇川に蘇川村驛跡あり  
蘇川あり山州乙訓郡外細の山中より出本郡原村に至る木山溪と合  
報蘇川と稱すを崎に至る蘇川に蘇川村驛跡あり

夫本  
花もまらぬわら果の蘇川之ぬ波千垂や葉ぬふ  
たうふも若瓜みし白のわら川わらも人の若佐もせぬ  
伊勢



免だん  
南山安園寺





カキ

真上  
 笠原  
 柏原社  
 世  
 瘡神  
 謬  
 あり



むのしなとあをたり女のえりまし  
かまきりな年が経てよひ口より  
くふとからうしそぬをいといとく  
たふさたりあらし川せり  
海をわたりとされを葉のうらふ  
ふたたりたりるあしかにせり  
あんねとこふとひたる

阿久の神社

阿久の神社 阿久の村にあり延喜式出處村の生土神といふ今住吉明神と稱す

菟川古城

菟川古城 菟川村にあり貞和より康安の間にそ菟川右馬允とて居り

長則とてに授け希志の細川高國に殺され長則は洛の百万遍寺に  
自殺に其子孫十席とてに據る天文廿二年八月長慶とては遠く  
孫次郎儀典に授けてあそふとて細川六郎織田七を誘土岐  
山城守とて小據る今山城恒因とて呼ぶ尋まれ

黄牛山靈松寺

黄牛山靈松寺 菟川村のふあり

本尊正親

本尊正親 仍基の他 中興無月和尚

尚寺初僧正

尚寺初僧正 仍基の創りて地蔵院といふ文和延文の間に藍破壊

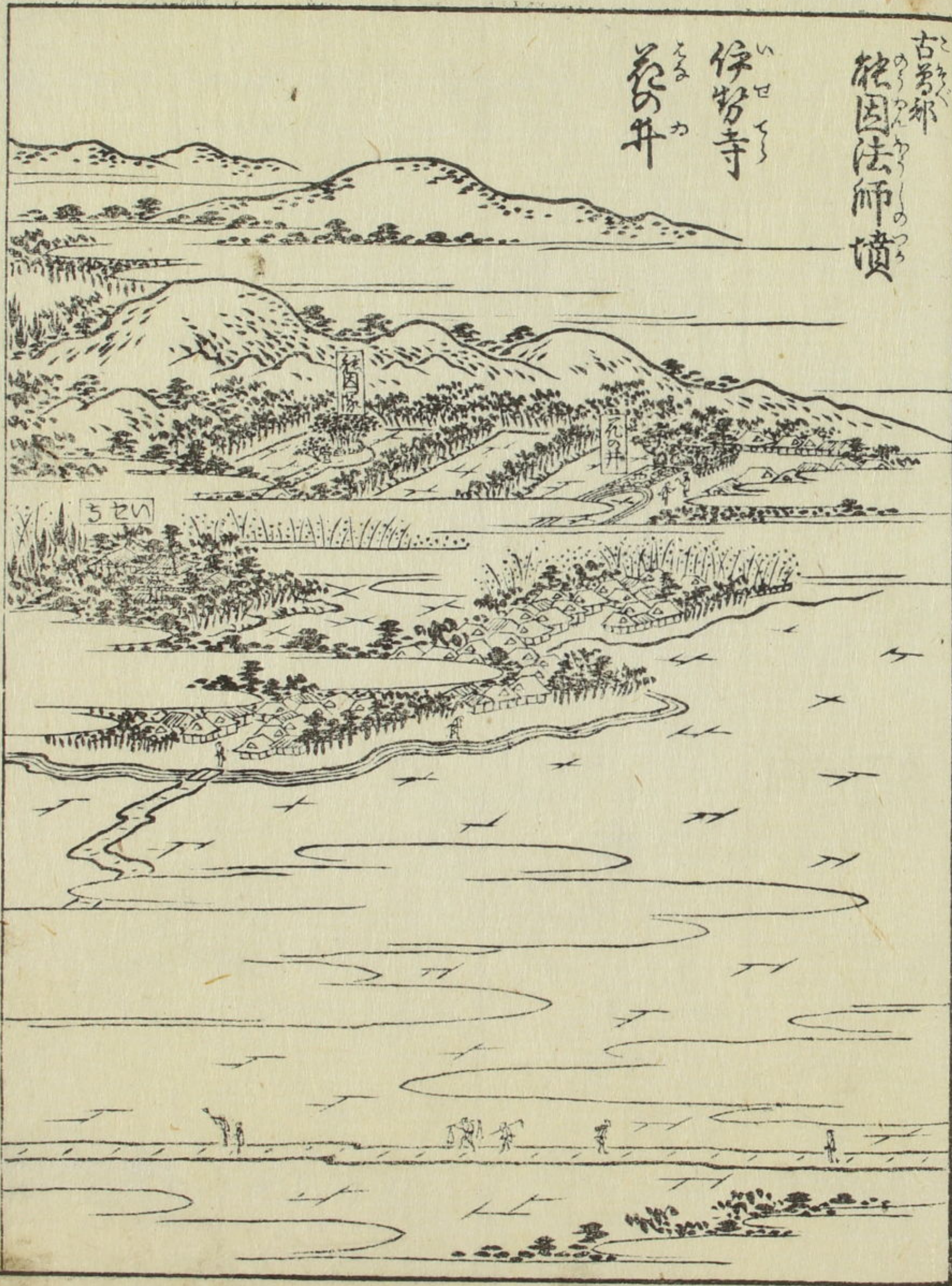
遠小松院

遠小松院 宇無月妙應禪師とて居り古松に光明結々といふと

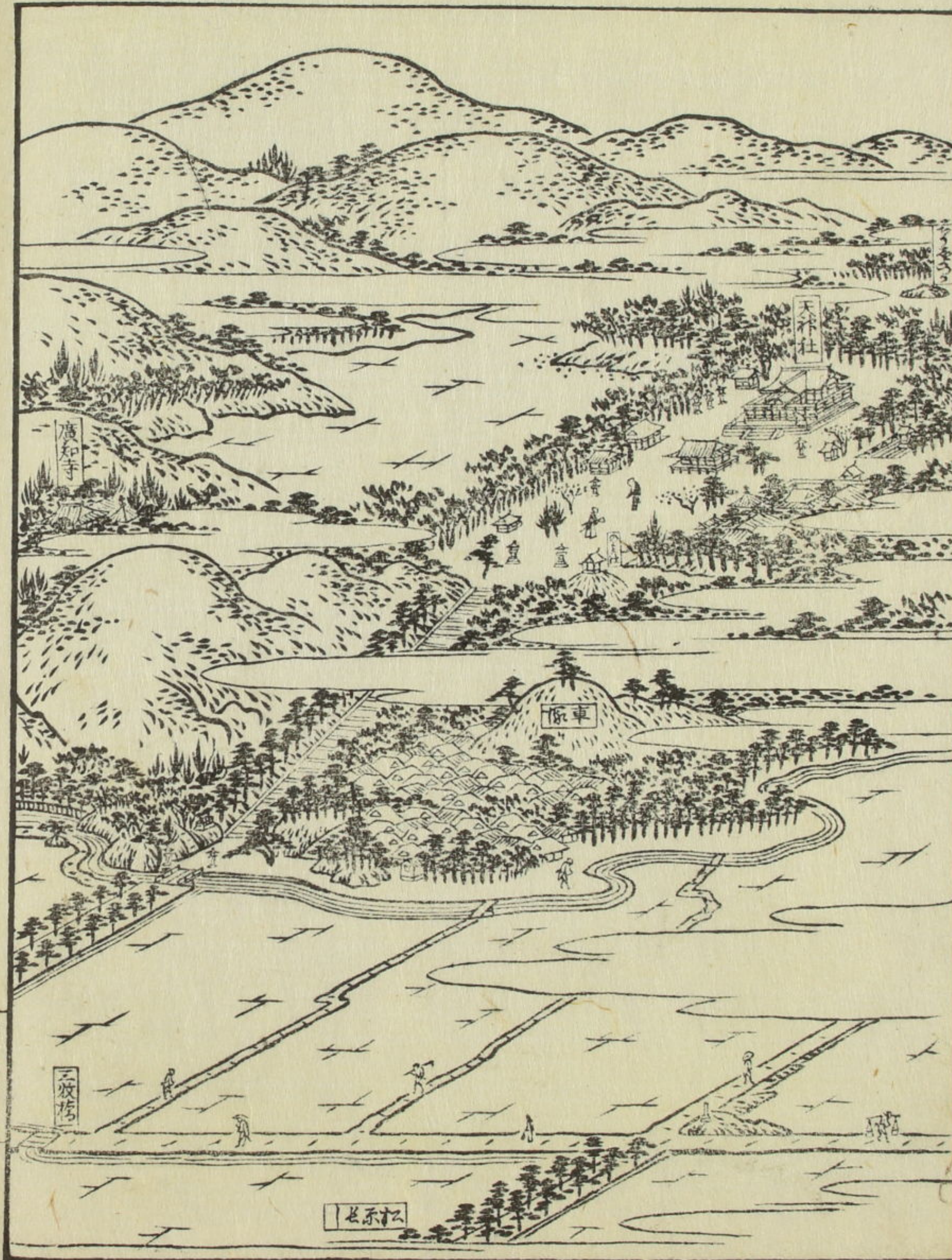
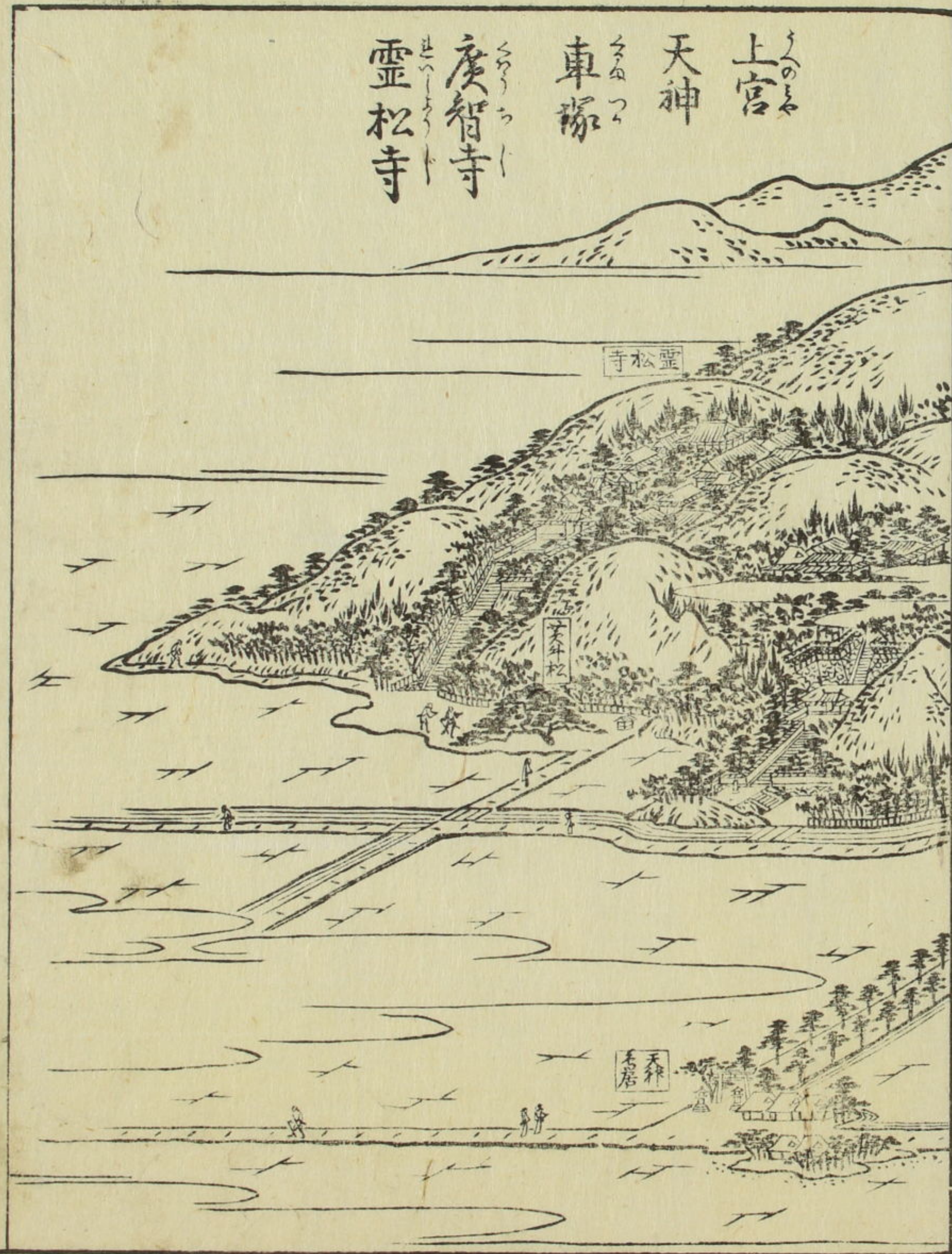
見る其光の根とある小金像の大慈長きすか一軀は得たりと稱上

古郷 能因法師墳

伊勢寺 養の井



上宮  
天神  
車塚  
廣智寺  
靈松寺





籠本寺より一壺松寺と改む時應永十九年に當り其後永保元年

正親町院の勅願所と成同二年八月廿四日論旨を賜ふ三好院を義興

土岐山城守定吉と檀那とあり則ち其の僧墓並にあり年毎正五九月

天下安泰 寶祚延長の祈禱して大般若經持讀あり

什寶 光明皇后所真宗の般若經半卷あり北殿司自畫の十六羅漢同

軍會の下知状 美斗松 當寺門前あり山号これより出る觀者の像出現

聖徳太子御代 聖徳太子御代當寺の祖と上宮太子へ上古の諸堂巍々

本尊十一面觀音 たり天正の去火小罹り荒廢に

中興正統龍溪禪師 禪師の弟子樹量和尚相繼して佛殿を營むる後

鎮守并財天 弘法大師の 三摩池 慈門小揚の額と

慈恩堂 佛殿の額 糸通 糸通の眼子 縁出 佛殿の聯

什寶觀音變相圖二十九幅 土佐鶴岡寺 高泉西筆 歷世禪祖圖二十幅

上宮大神祠 上田郡の上方あり此地の生土神と例え加朋神社傍成春松院と

其古跡ありてまに祀りて犯すこと多し松ふじ地中見の御されて菅云祖光

野見宿林成ありて中の人織田信長寺社と破御の時天満宮と改り

又去松院小石燈籠あり古代の 野身神社 當社後あり

檀神木 高槻城向ひにあり護主神武天皇は樹の下に陣し東征しひは祥瑞に候

谷山松 王川のやうにあり淀川堤の西小笠の形は土俗に南方の武臣

象王山伊勢寺 古勢村あり伊勢の舊跡と後世寺と

本尊正親世者 慈覺大師也 伊勢御古墳 佛殿の西

什寶 古鏡一面 伊勢の古鏡なり又古鏡一面 伊勢の古鏡なり又古鏡一面

伊勢御影 古鏡の影なり 伊勢寺記 一冊 伊州元政

伊勢寺 伊勢の御の旧棲あり後小寺と一人を祠祖と候祥忌と

每歲十月廿一日必心く法廷を修に伊勢の御入大織冠九世此孫  
 式部大丞兼本三頭藤原繼蔭が女之又繼蔭の伊勢入和蔭藤原  
 の任小補せられ経歴に當小伊勢守たりし時其公誕生を祈り伊勢と名入  
 宇多帝東宮小補せられ時沖息訃と成り絶世の時迄ありて和香と名  
 名を教くありて敷盛小徳の年あまそびへ便伊勢也治伊勢集  
 の川とせりる 宇多帝崩じゆて後小徳道出樓して終公  
 せりゆひしとを其より州室を伊勢と名ひけ早霜累る小正の  
 乱小堂宇日記一時小仄儘と名え和元年祖永和尚中興の力を奮く  
 松と栽竹と種く伊勢の祠堂と造り古鏡を廟中より傳り時の人みか  
 赤くとくあらに高槻の城主永井日向候大直清羅山子とて伊勢が  
 廟碑を撰り免碑碣を廟上小建く不朽の勝蹟とあらにやと免  
 あり  
伊勢の古史より分明なり一説業平の從子とて又賀茂の馬廻り説  
 小伊勢と傳言て入業之官女伊勢の所の書ありしありあつとぞ  
 名小徳の伊勢守なりその人妻の上北遊ひとある  
 殿の遺言とありしに小徳居る免終公の

五ノ四十八

志中より玉の意もいとひさそ光るあふ小かたはく海に  
寫しそりし繪姿とを存りて  
 終因法師墳 古跡郷村小あり 終因出樓の古蹟と  
後拾遺 終因法師の古史より分明なり一説業平の從子とて又賀茂の馬廻り説  
 小伊勢と傳言て入業之官女伊勢の所の書ありしありあつとぞ  
 名小徳の伊勢守なりその人妻の上北遊ひとある  
 殿の遺言とありしに小徳居る免終公の  
 我宿の枝は甚ふあらとたを生駒の山をえへはりりる  
對馬小ありてはりりるはの國にやと  
 終因法師の古史より分明なり一説業平の從子とて又賀茂の馬廻り説  
 小伊勢と傳言て入業之官女伊勢の所の書ありしありあつとぞ  
 名小徳の伊勢守なりその人妻の上北遊ひとある  
 殿の遺言とありしに小徳居る免終公の  
 今あつて今ゆらんはの國に終因法師のあつてはる葉小  
大江嘉言對馬小ありて下ゆそ難波は江の  
 あつてはる葉小ありて下ゆそ難波は江の  
 國にやと  
 終因法師  
 能因法師者 大 臣 橋 諸 凡 十 代 之 孫 也  
 本 名 永 愷 父 曰 肥 後 守 元 愷 永 愷 補 文 章  
 生 入 道 善 進 士 後 道 世 改 名 能 因 補 古 曾  
 部 長 入 道 善 進 士 後 道 世 改 名 能 因 補 古 曾  
 以 長 入 道 善 進 士 後 道 世 改 名 能 因 補 古 曾  
 詞 世 以 爲 美 談 兵 部 太 補 大 江 公 資 五 条 之

東洞院宅庭有大櫻樹每年能因自古曾  
部入洛往玳其花亦依人而其名彌顯  
後冷泉院永兼四年禁裏歌合時能因  
和歌有室山楓竜田川錦之句不亦  
乎其餘詠歌繁多不可枚舉也  
城邊有其舊跡今畧書其姓名以傳于  
世云  
慶安三年春三月日  
日向守大江姓永井氏直清置

花之井

別所村小あり法泉堂署小洞以備小碑銘あり摩滅しく見へ  
或曰一名山下水といふと古名都入道此和可小と伝

新古今

足川の山下水に教んをそす由白妙小ワレ老にたり 終園法伴

高槻城

古高月と書け皆名野野高月邑といふ礼園の時き日本高槻あり陣と  
定りれより高槻の字小改云城主初は道義連といふなり高月名と林は十二代の  
後入江直道の時波流次其後和田守高月山右衛門居城一元和年中に土岐山城主松平

野身神社

当城内小あり延喜式内今外願天皇と称は所の主神といふ例永九月十日日  
持社八幡宮八幡町にあり宮永年氏の祖神と云天社共に城内にあり

大塚殿

大塚村小あり實王塚と其姓名詳ならずは今生土神の所藤所とい  
慈慶法師の家集小冠の大塚冠柳と讀み尋あり

磯崎

淀川の東小ありと磯崎道西小向といふて持河の畧は淀河に限る  
一村の内小後とて淀河の東小あり持河といふ一は淀河の流也

相向へ後世洪水の時流水直にありて磯崎の一村は淀川乃東耳  
五ノ四九

遺り移れも持河の郡内ありゆ今小橋上郡といふれ園中の事

冠柳

冠村小あり柳の梢冠の形小加とる名本あり今移くあり

鴉殿蘆

鴉屋村の蘆小生出る蘆と蘆葉の義背小可くとくむより  
世小名高く貢ふ献るなり

土佐日記云

と育ちやのといふとさほ小泊ゆ云

青雨

春日神祠

東天川村小あり母田若侍の都加母止塚足跡塚俱小西天川村  
生土神といふ

上牧神祠

上牧村小あり若屋上御牧跡上牧村小あり中御牧共小延喜式出  
井尻の生土神といふ

三牧橋

若川村の小街道小後と石橋と土人云む若川小鬼殿あり  
あにかけといふ由海澤といふ

檜尾川

若川村の小あり七瀬川あり源大隈山より出く成合安備  
天川等々小経く冠村小至り淀川小入

鏡井

上郷下村小あり妙法家日村小あり小井日村小あり鏡の井と  
上郷のて竭せ

大澤山

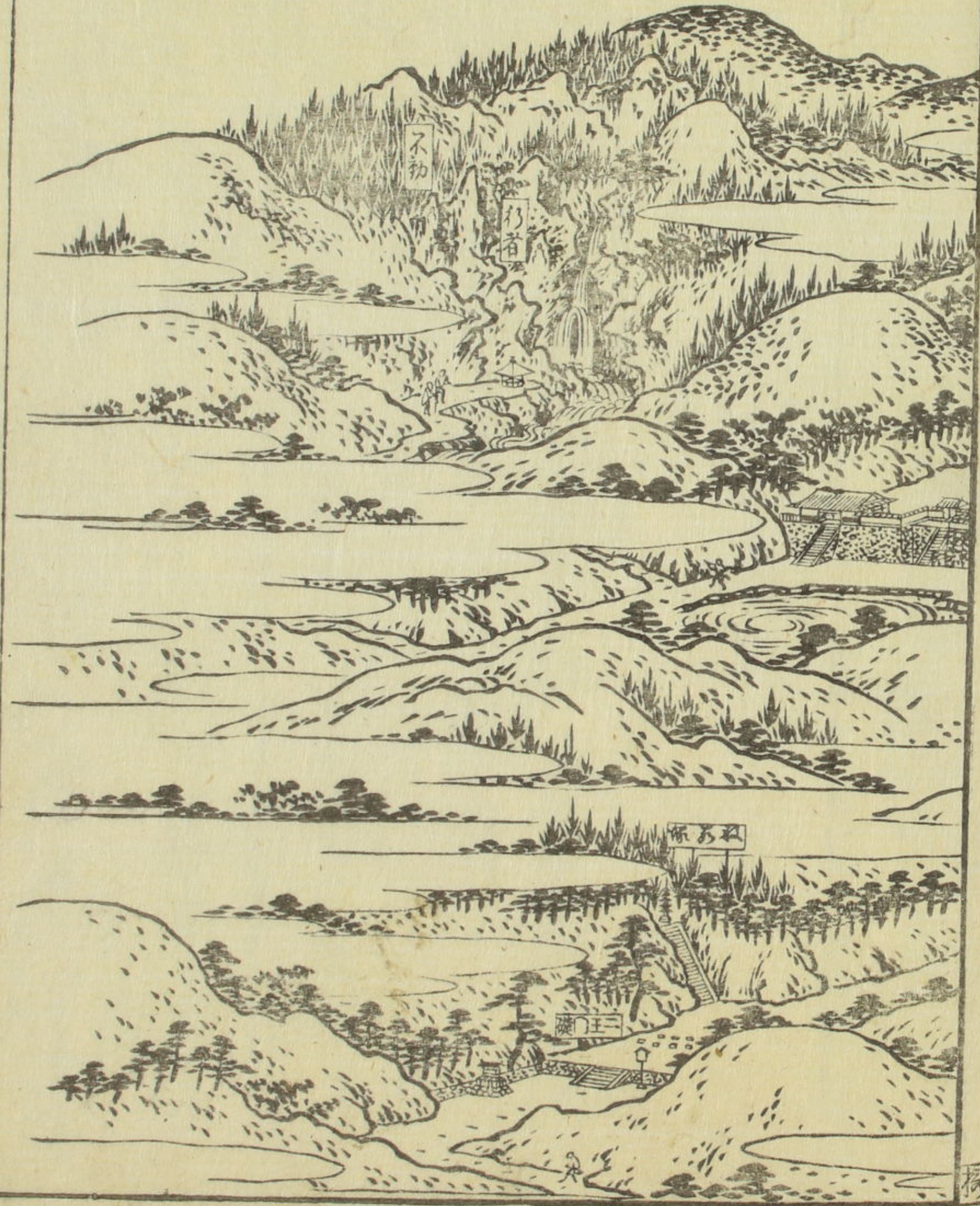
大澤村の上方とて山峯横り溪谷長し  
山向に隈あり

旗立峠

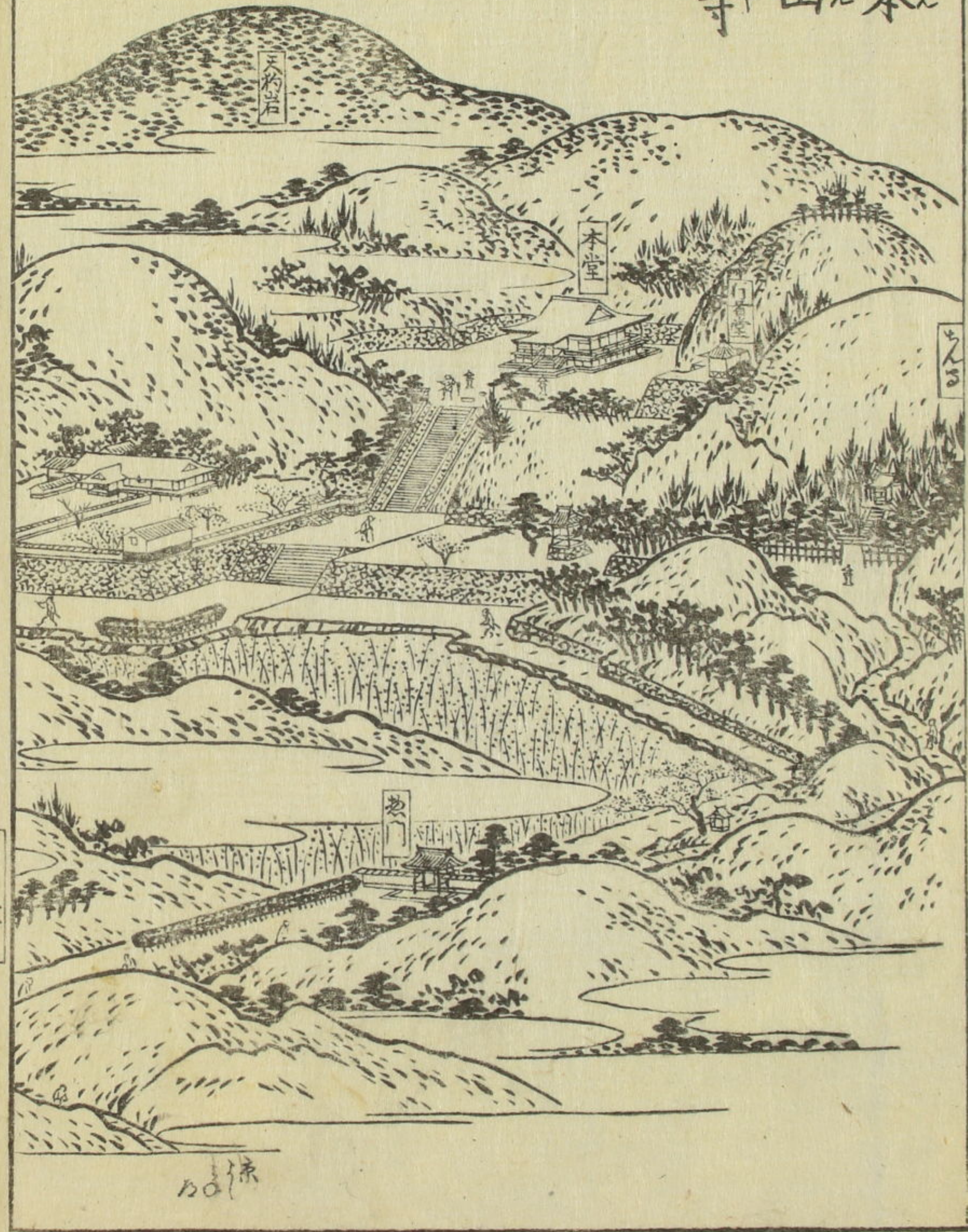
大隈村の旗立あり丹波園田村へ出る新傳に云  
源義経一の谷小旗と立崎なり

のに赤松入道圓心とて一説小大建武

五ヶ水瀧



本光山寺



五ヶ水瀧

本光山寺

原山

原村の上方小あり山脈神峯寺あり嶺く山林標多  
眞神宿禰と祖不同一うに  
名寄 福王の後あり

原の池

原山の麓  
後拾遺  
原山の池と云ふは  
六帖  
むと玉に取てく氷る原の池に雲と雪も亦波も立へた  
そこの池にけしつる玉藻のやうそめ小若とらうや野あふくふ  
貫之  
信實  
後拾遺

荻谷神祠

荻谷村あり其日神と林社内小大岩あり  
仲実

北山本山寺

原村の上方小あり天台宗  
安国寺の南山に對に  
後拾遺

本尊毘沙門天

後拾遺の化也又三尺寸脚士九吉祥天女右禪賦をま  
関山堂  
本堂の東小あり役行者が安に額後僊窟  
後拾遺

鎮守

梶尾 白山 虎石 本堂の中小あり虎石の形なり  
五水瀧 本堂の後五町許小あり五丈許飛龍環珠に投てけり  
時龍水五色たるく名と云ふと云ふと俗に諸疾眼病を治に  
毎茶末のそりりみん天下安全の護摩修りあり

忍葱上人旧菴

方丈の南小ありは菴より南方あり菴乃  
天狗岩 當山の絶頂 赤小豆阪 當山の西の麓

神峯寺

當山より廿町許小あり山州若峰寺のり路あり  
鐘銘 松花堂の 虹梁 本山寺造管慶長八年二月日

北山の額

一箇ハ 後田友胤  
一箇ハ 庚澤 兼

文當山

文武帝元年後小角和州葛城の峯小若修練り  
好小至つる入る山川の出遠子載の奇樹繁茂し怪岩並石高く聳  
く崑崙の玉と列ひる氷を見ゆこれ神僊の傍地とて岩居瓜ト  
中入新小忽山谷初揺して見沙門大出現しゆん昇大悲の誓約

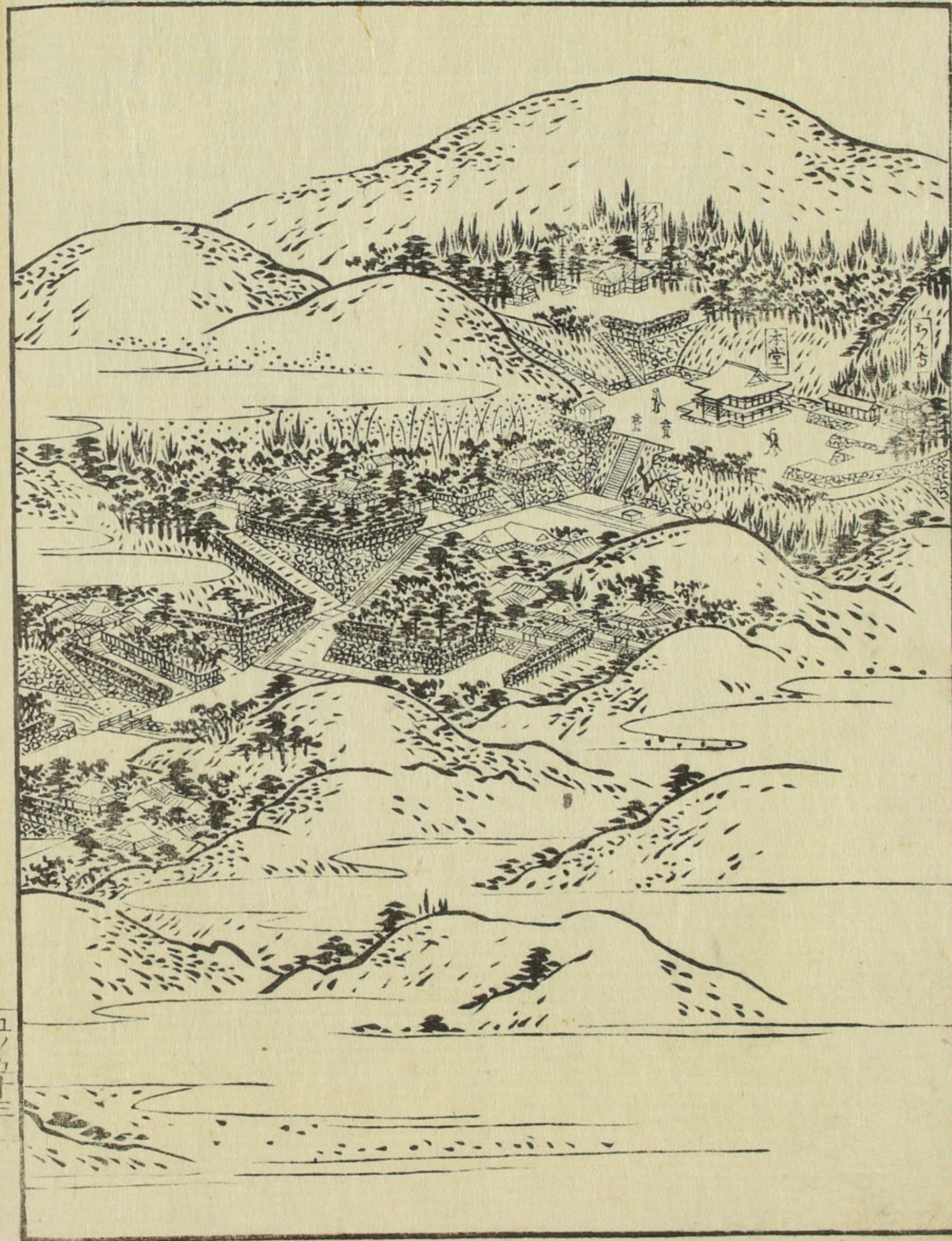
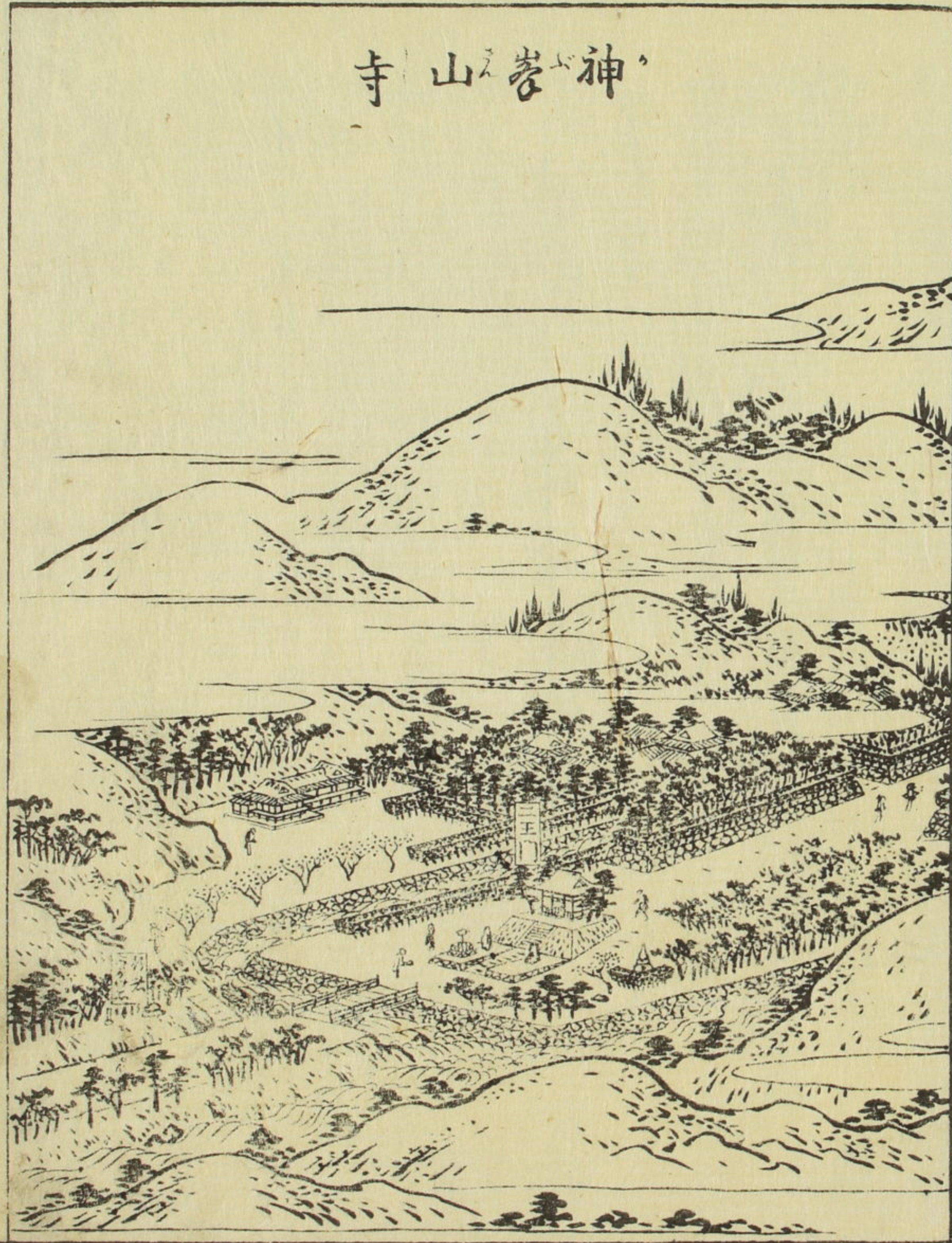
舒のい末代瑞依の尻生少速小十種の福祿公與入一中寛入  
 仍者歡喜して弟自尊容公刻と尚嶺に安通一多人足本邦  
 二昆沙門の其一一山州駿馬厥后開成皇子淳年四十二年の附竊小  
 官中出の弥勒寺の若仲若母公師とく出家一寶龜五年  
 六月後行者の徳行と慕せる山の遺跡公訪く堂舎公建  
 立一大般若經公一字一石小書寫一多ひくあ小藏ある小蹟  
 今小存せう又精舎の後小瀑布あり仍者く小法一多附龍水  
 變て五色との故小其名あり諸疾公け龍小浴とれ治せたとい  
 事か一大治年中けの標小橋輔元とい武士あり父子癩公疾  
 一七日け浴とを述小平念せり父子大歡び財産公喜捨一く  
 堂塔公修造一遂小魚山山州の良恩上人小投とて父子共小出家一  
 名公良恩思恩と稱に近衛帝詔公降一七思恩公公公當公  
 十八世く良恩の境内小彦公造びく融通念佛の法脈公継く

佛号の教とゆるとく赤小豆公公く一其孫と菴の傍にちく一く  
 其乃今小土の色赤く人公んで小豆取とく星霜けりりて大正の以  
 ち右邊に存小寇大一諸堂一時小灰燼とる慶長年中内大臣  
 豊臣秀頼公佛建堂あり一厥后又一位藤太夫人桂昌院殿再建  
 修補ありせれ國家鎮護の淨刹とを形り小く心公已上  
 什寶 蒲萄硯 硯面小蒲萄の彫あり長一人そす八分中七寸八分  
 伺向馬石 盆石く石の形を公て名とに寺説上  
 此二品ハ天文のにね氷彈正弼久秀當郡東五百住に在城一當山  
 昆沙門とを為小塔依一並差公崇り武門の名譽公とれまはしるといふ門く  
 庄園公秀附一は家寶の二品を奉収せり

攝州 鳴上郡本山寺有奇石往昔松永氏  
 霜臺 所寄附之一盒石也厥形似三鴻馬落  
 沙頭 欽倦翼附因之名馬石矣現任嚴鎮  
 印就 干予翼附因之名馬石矣現任嚴鎮  
 一箇 堅頑予請記之仍賦一石矣現任嚴鎮  
 床頭 相對紫阜野釋蘿月喜春來不背花  
 法沙 頭 欽倦翼附因之名馬石矣現任嚴鎮

昆沙門ハ天曼陀羅ニ幅對向眼妙法院竟延法親王  
 松平豊後候資訓寄附

神が峯山寺



根本山神峯山寺宝塔院 大隈村の上方あり

本尊毘沙門天 後行者他長尺八幡士九若祥天女右禪職奉子又大日如來文殊尊梵天素戔等公女俱小引基の化

阿彌陀堂 二王門の外あり 慈覺大師の化

観音堂 本州長谷寺觀音と 同本阿彌あり

光仁天皇塔 向成皇子の所あり 天應元年十二月廿二日崩す 皇太子所菩提のたれ小十三層石塔圖と建られし

鎮守 山王稲荷 役行者笈掛石 二王門の南 二王石 二王門の傍あり 金比羅 二王門の南 二王石 二王門の傍あり 高七八余

二王門 金剛力士女に類根本山 九頭瀧 経藏の東

明王嶽 本堂あり 三所并 巽あり

それい寺へ後行者の開創あり 向成皇子の中興あり 文武帝

元年日本高山の中 拾遺抄曰 北敷山 北良嶽 伊吹山 神峯山の嶺小 愛宕山 金峯山 葛城 嵩山

至り四方の出溪をみるを南方小溪水漸歴して氷床の梵宮あり

傳く賢聖教向の盡區あり今の九頭瀧教向松を其院の側あり

金毘羅奉子出現して曰豊草原開闢あり已未は山小徑に疾く

あに梵宮ありをみる可ありと告る行者明王嶽小至り

藍婆毘藍婆の二鬼小壺を授け毘沙門の像を祀り岩上に安置

しや其時虚空より蔵王の三神紫雲の中より出現あり胎藏界

金剛界の密法を行ひしゆ小行者又交の二石を立置り熱門の

二王石あれ其後開成皇子もあにありて中興し又攝輔えが難治の

病も九頭瀧小俗を忽平念を則出家し大原山に良忍

上人を師とす良忍と名を融通念佛のり者と成阿字が谷小原に

繕ひ廿一年の間称名念ふに往生を遂ふたり元元元年黒谷の深空

上人當ふ小治し良忍上人の墳あり至りお修念佛を言聲小唱を

塚の中より正しく十念の聲を継しとせ云傳ふあり

已上寺記又伽藍 開基記の大意

安備神祠 成合村あり 法日神と称し毎歲正月十四日粥と煮て神供とす ちとちと年穀豊凶の占とす 村民社願に會し粥を煮て 管の中に入る分量の多寡を占ふ 豊凶を占ふと云ふあり

のい所の風俗

ありとせ



般若社安備祠の般若故宮日村小あり家伝仲新を交とり或曰

思ふといつそのまらけねあつて思ふる色の方たを成しよ

あひうひをひとめふさうたひ人ふいとそのまらけ志あれ

君みも秋とあそめ津の園れいその杜れ家身ともつか

志いともいそその杜乃おあつて色ふ出てき人ともあれ

般若里安備村井ノ口井日村ふ

えぬ人ふいつ語らん口形のいそみの里れ山吹のまれ

邂逅山金龍寺紫雲院戒令村の山腰あり坂路八町

本尊普賢菩薩脇士左梵天王

開山堂開山千親内供の教徳安に慶長七年二月豊臣秀頼公再興

二井寺たをく蹟密の法を密の法を密の法を

又時々後口小出く自馬丈と成密客の芳と密客の芳と

世の人若くは伴とつて

邂逅池本堂の西南あり池中小舟附天社あり能因秋松云栴津園

ま風小今氷も玉坂の池乃なりそらけ波せう川

うた世小有へんともあさうけつてふさひやいそる

紫雲塔方丈の上牛頭大王祠熱門の傍甌巖坂路六丁目

能因櫻後小あり能因法師像後樓の池之傍旧跡

杖来隠逸傳曰偶々惜春登金龍寺山路無人落華

寂々々能因不知歸日昏鐘動時詠和歌人

彩古今寺いふまふふふてよと信々

ふさやの妻の夕くれきそんま入堂の種ふ花せ散々

それ金龍寺桓武帝延曆年中衆議の信是雄卿の系創とめ

安備寺と野を其らう百餘家を経く千親内供再営より金龍寺や

改めゆへ内供中納言橋公頼卿の二男相模を敏定の子千親其面

寺小治一中対北の方小治紫雲たをくあれとるく攀登り

中ふ一つの池あり其水金魚よく瑞雲も亦は池より立出池の

東小一字の伽藍あり釋尊の像安坐して安備寺とて眞小鐘聲  
白雲小和し清涼人禁非道の古寺あり又は山のをり  
足の中流の方遠く晴く日想觀の便ありもあらず南園  
眺く故園千里長江十二風の心とあはれ盡域ありそく池の  
側小庵ありむきて居たつてひる今の池之坊は旧蹟く又は池より  
龍女現れ出くは水と耳に成佛とあれり金龍寺と号く安和二年  
天下旱の時 冷泉帝千觀小勅して祈雨ありたれ忽青雨降く  
善民太平承平其後康保元年一字と建く善賢の像と安坐に  
内供ある時山崎の橋下におりて橋占瓜園のひるある一の牽牛に  
騎く髪少絲かづとていとのと絡るる勢と上くおひる十悪五逆  
謗方等極重最下の罪人も一夜有無と唱念を引接さるりて疑ひ  
かしくなりて一く涙くかた消すく小欠小なる内供か乃奉の  
言葉と和舟小ぞ涙くひる

おぼろし十悪五逆謗方等はあはれ身も洗ゆる罪小 千觀  
梓山崎の橋を天平年中僧正仍基かけ初めひる勅ありそな々つては  
と心も河水淋漓して今の世あふ橋本の宿のそ終小遺きり如の  
源信傍郊の橋本の亞女小といく被衣志ほり内供の橋占瓜園くは  
落しありある時山小若流りて梢もさつり秀谷法水結く眞見の  
水も考く山房寂寥とて人跡稀ありたれかくを涙くひる  
孝はさふんさふんさふんさふんさふんさふんさふんさふん  
法の身れ月つら身とてせも益明のをれんせぬんたり 全 千觀  
け誦の勅撰の中も入く初の邂逅のありより山跡とあり永觀元年  
大居士百壽齡六十六兼入寂のゆゑ 已上元亨釈教及び寺記等の  
麻茅原 金龍寺の禁小あり里談云能因法師は系くく冥女の死より成  
と誦のゆゑの屍初めあき果むりより梅ありり眼へくたはく又りせの  
ゆゑ終小あき小禁の石は長く言ひゆくとおんは石今小あり 終因法師

え金龍寺

山家集

おほつふ

いつめ山

麓うら

ほろ

花の

咲く

西の法師



世五十一

杉



草の  
の  
を  
おの  
千代



金亀寺山  
松茸狩



尊氏直義之軍を率して上洛の向要害の地を放り防た  
 戦ふる兵庫小引退り由義員御早馬に進て内裏を奏聞  
 ありたれを主上大御殿有く楠判官正成を召れり急を庫へ召  
 下り義員小力と合せ合戦を致しと作らばれ正成畏く  
 奏し尊氏已筑紫九國の勢を率して上洛致し候あはれを  
 定て勢を度如くお我候らん御方の疲る小勢を以て敵の横に  
 寄る大勢小勢合く為るの如く小合戦を致し候り御方決定  
 打負候ぬと覺へしを新田殿も只京都へりされりてお為の  
 如く山門へ臨幸あり候へ正成も河内へ召下り候て畿内の勢を  
 以て河尻公義塞だ兩方より京都を攻め兵糧を討つる如く  
 候行ありを敵の次小勢を召下り御方の目々に隨て馳集り  
 候へし其時小勢新田殿へ山門より推寄らば正成の搦手より  
 攻上り候り朝敵を一戦小滅と奉堂中小勢と覺候新田殿も

定くは料簡候得共路次り一軍もせざるん無下小之甲斐如く  
 人の思はんを所と触り兵庫に去らばと有り覺候合戦免て  
 も角ても始終の勝を肝要あり候へ能く遠慮を以て  
 公議を定らるる如く候と申されを誠小軍旅の奉へ兵に讓  
 らばと有り諸卿會議有る小重て坊門宰相清忠申されけるも  
 正成の申所も其謂有るとも征罰のおふ下され節度使未  
 戦て成さば奉小帝都と捨く一年の内小二度中を山門へ臨幸せん  
 奉且の帝位の在らぬ又の官軍の道と考へあり縦令尊氏  
 筑紫勢を率して上洛とも去奉東八箇國を順へり上り  
 時の勢も小も過下几戦の始より敵軍敗北の時に至るまで御方  
 小勢ととも毎度大敵を責應せし小奉か一是全武略此  
 勝る所小非只聖運の天小叶る故と然と只戦を帝都の  
 外小決して敵を鉄鉞の小滅せん奉何の子細あるれば只

時公替を捕下はべしと申出されし正成は上りこの異儀と  
申小及は延元元年五月十六日小都とまき五百餘騎を兵庫  
へ移下ける正成是を最期の合戦と思ひたれを嫡子正行が今年  
十一歳より供しつゝる多思入様有しを極井の宿より河内へ  
赴し遣せし庭割と遺しつゝる獅子子孫産く二日経る時殺  
千丈の石壁よりあれと擲具子獅子の機分あはれ教ふに宙より  
駒返りく死する半は得せしつゝ況や汝已ふ十歳小能くぬ一言  
耳小留らば我教誡違ふ事か今度の合戦天下の安否や  
ち向今生みく汝が顔を見ん半是と限りとあはれ正成已ふ討死  
とて圖あは天下の必足利尊氏の代小成を公得べし然るとも  
一旦の身命を助らん為小多年の忠烈を誓ふ人小出半ある  
危うく一族若黨の一人も死候くあらん程に金剛山の邊より引  
籠りく欲寄来しを命と答由が矢若小怒く義と紀信が忠に

比まへ一足と汝が身一の存りるらんむと信々合先く各東  
西へ別道ふたり昔の百里奚へ穆公晋の國を貸し時戦の利無らん半は  
鑿て其將孟明視小向て今と限の別と悲し今の楠判官の敬軍都の  
西小迫付と圖しつゝる困必滅ん半は怒く其子正行と留く無跡  
との義と進む彼異國の良彌足は吾朝の忠臣時千載と滿川と  
いとも前聖後聖一揆りく有難り賢佐之下畧

極子小つゆなまきや楠の下畧

坂口八幡祠 極井村小あり楠正成子德正行に別り楠水の旗とありに蔵の  
の画 軍器

水垂瀨山 瀬井の東あり類發國史小水成小能延曆年中  
後千 帝は母小遊瀬一や半日本後紀に記へり

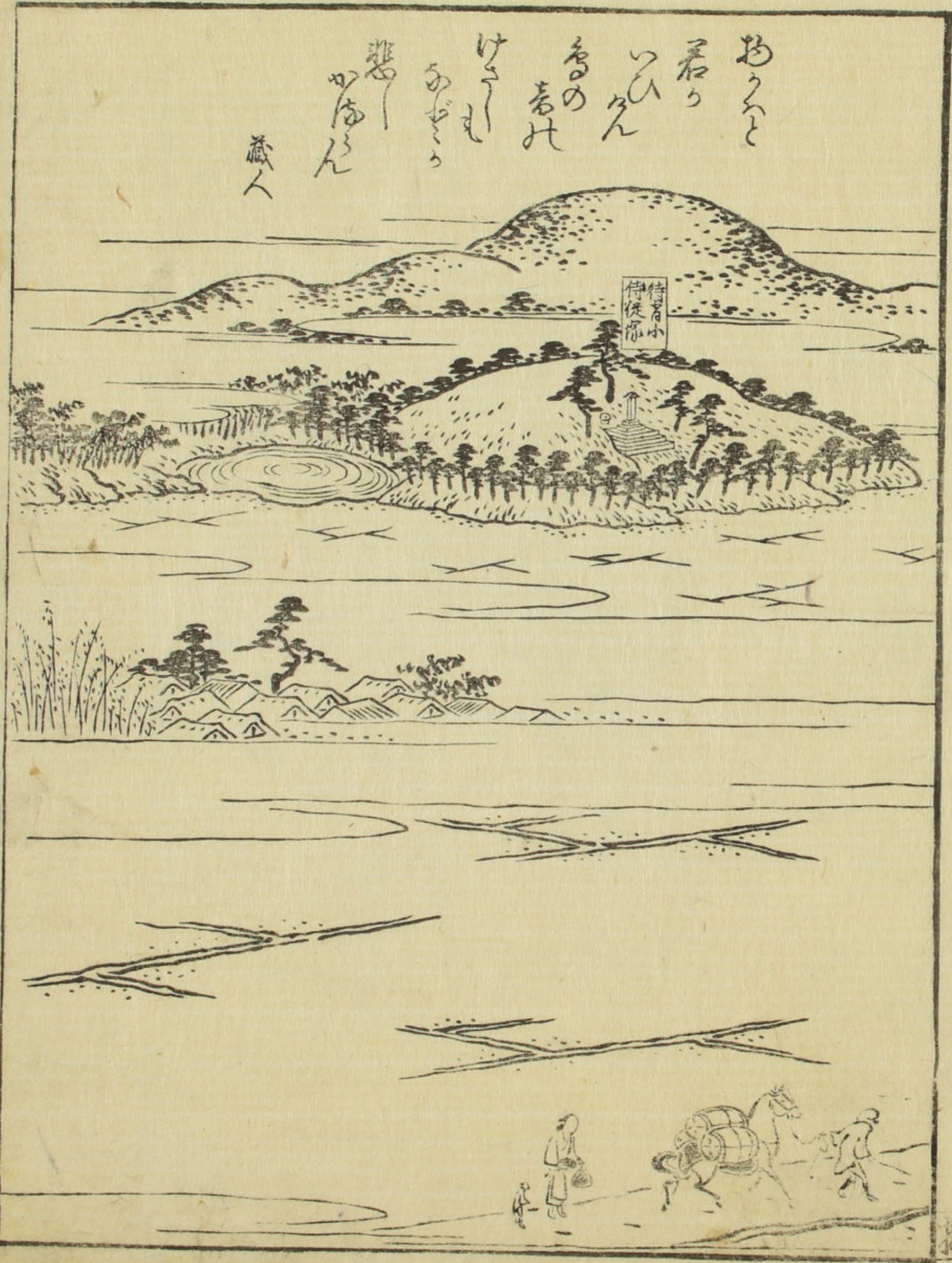
水垂瀨山夕かけ茶の下落や秋かく麻の洞うらん 後之戦  
水生山玉とみくたしつゝるをてまをれぬ里と月やとむらん 後之官  
夫小 みる勢山むりの花は走るくつ月の月を今い喜のを承る 後之院  
二条

待者小侍従墳

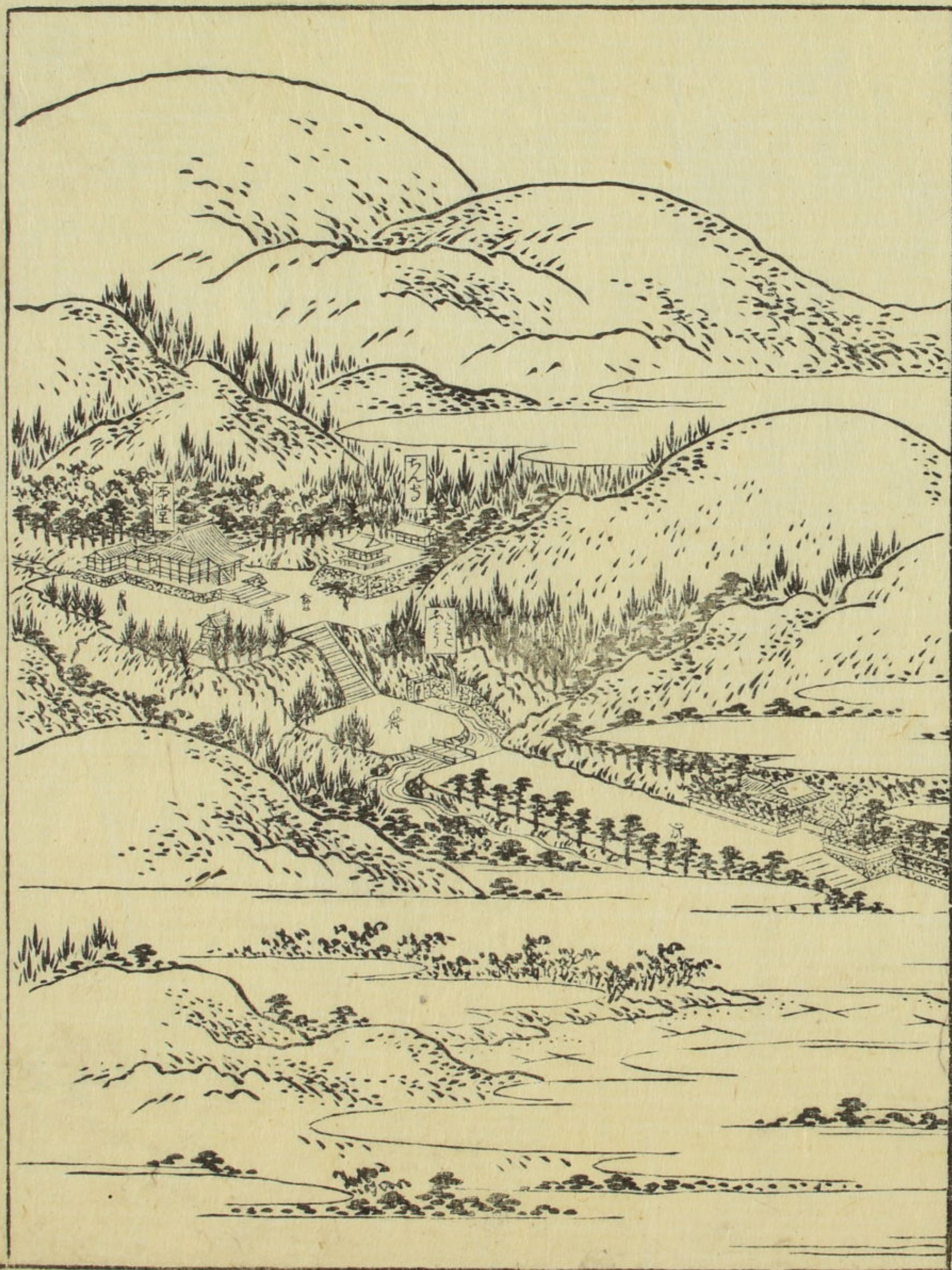
侍者の  
さけり  
ツの  
聲  
きけ  
わさ  
のい  
ま  
ま  
ま  
小侍



おと  
君  
つ  
名  
け  
あ  
悲  
蔵人







大山崎  
 西観音寺







桂川之世橋と流る向町と唐く山崎小向の城構の奥戸院の旧跡小  
 至信定園西之十三州の官道ありて文禄年中豊臣秀吉公朝鮮  
 征伐の時闕く折之故唐海道といふ古の羅城門より南官道ありて  
 久我繩を淀の大波に流す山崎橋といふ戸院に至るありて  
 南の芥川宿河原今郡山瀬川昆陽より西宮兵庫湊明石浦に至るあり  
 周禮曰凡て國野の道十里小廬あり廬亦飲食ありて千里小宿あり宿亦路室  
 あり左傳曰楚子乘驛小あり驛ハ驛馬之則馬迹の制已小周は凡て千里と  
 ありての制と護と往還の旅人と安かりて驛亦官道といふ  
條のまじはらへしむるんをせりけり  
ふまたあつらんかゝるありあまなり  
 古今  
 いのちた心小ありおあり別ありて一なり

花女を為り

攝津名所圖會 卷之五

大化元年申  
大化元年  
閏四月三日



大化元年

大化元年  
閏四月三日  
庚午六月廿五日  
庚午六月廿五日  
庚午六月廿五日